



Architecture and Society

建築と社会

特集/食と建築・都市

日本建築協会

日本建築協会80年史
1917-1996

「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中 頒価 3,000円

1999年7月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することになりました。大正6年3月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関 一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

*

申込先 社団法人 日本建築協会

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャングाइズ・マートビル7階B室

TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984

頒 価 1部3,000円(税・送料込み)

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

*

「日本建築協会80年史」

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール(片岡 安・設楽貞雄・武田五一・池田 實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱 勉・松本禹象・宗 兵蔵・園部文雄・日高 胖・野村一郎・古宇田 實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂 静雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田彦彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貴・足立 孝)

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」一尾亀清四郎・大林芳郎・小西 岬・佐野正一・横尾義貴・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言一

■執筆ワーキンググループ

坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編集委員会

長谷部朗郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉 毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二

日本建築協会の遺産と功績

「日本建築協会の遺産と功績」(坂本勝比古)より

片岡 安

「草創期の人々」より片岡安の項

日本建築協会の発展と功績

「日本建築協会の発展と功績」(吉田悦二)

会告

第2回

続大阪「かくれたええところ」
再発見コンクール
入選者決定

社団法人日本建築協会は2017年に創立100周年を迎える。その記念事業のひとつとして“続大阪「かくれたええところ」そうせい（創生）プロジェクトを昨年より実施している。今年は昨年の『大阪「かくれたええところ」再発見コンクール』に引き続き、『続大阪「かくれたええところ」再発見コンクール』を行った。今年も昨年同様審査委員長橋爪紳也氏（大阪府立大学特別教授、大阪府立大学観光産業戦略研究所長、建築史家）によって、3月12日OMMビルにて厳正な審査が行われ、応募総数202点の中から入選9点を選ばれた。

入選作品の展示は、大阪市立住まい情報センター4Fにて平成22年4月26日（月）～5月9日（日）10:00～17:00（最終日16:00）まで行う。

※作品は当会HPでご覧いただけます。



続大阪「かくれたええところ」再発見コンクール入選者一覧

結果	氏名	題名	名称	応募対象所在地
入選	和田 康由	水都大阪の詩		大阪市福島区野田2丁目～大阪市西区川口2丁目
入選	福田 知弘	北浜テラス：「実現」から「継続」へ	北浜テラス	大阪市中央区北浜1丁目1-12
入選	大田 好子	残った町名「菅原町」	菅原町界隈	大阪市北区菅原町
入選	二本松 武典	川跡のマリーナ漁港	伝法川跡	大阪市此花区伝法5丁目
入選	山本 龍造	上町台地、宝泉寺と六軒長屋間の路地	六軒長屋と宝泉寺の間	大阪市中央区龍造寺町7-17～19
入選	川口 将武	多重的河原風景	うなぎいし田他	大阪市北区菅原町
入選	円満字 洋介	半開きの水門		大阪市西区南堀江1-6
入選	中原 文雄	平成の門	文目堂（あやめどう）	大阪市中央区安堂寺町2丁目
入選	加藤 祐策	阿部野ベルト地帯：細なが～い「線路と高架下と空き地」	JR阪和線高架界隈	大阪市阿倍野区美章園、文の里

「上本町YUFURA」
見学会（予告）

今回は、なんばから移転した「大阪新歌舞伎座」を中心に、商業施設・オフィスの備わった複合施設ビル「上本町YUFURA」（6月竣工予定）を見学いたします。

日時 2010年5月26日（水）
13:30～16:00

見学先 上本町YUFURA
（大阪市天王寺区上本町6丁目：大阪上本町駅南隣）

定員 30名（先着順）

＊詳細は、来月号
にてご案内いたします。

なお、決まり次第、当会HP
（URL：http://www.aaj.or.jp）
に掲載する予定です。

2010年は9月号掲載で、応募締め切りが6月30日となります！

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成22年9月号

「第57回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに56回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人々を紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

57回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積み重ねている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1. 応募される人は満35歳（平成22年7月31日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
2. 原則として、本会会員である すいせん者を通じて応募する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあつて、なしたげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）
5. 「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第57回青年技術者特集号」（平成22年9月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

平成18年度から、青年技術者の公募は早めています。第57回青年技術者は、本年6月30日(水)までに応募できるよう準備をお願いします。

6. 提出資料

■すいせん用紙

請求は、すいせん依頼先担当部署、または本会事務局へ。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めてA3判用紙5枚以内にまとめる。

- ① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
- ② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料
- ③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料
- ④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。

7. 提出期限 平成22年6月30日（水）

8. 提出先 日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャндаイズ・マートビル7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

Email: ken-sha@aaj.or.jp

9. 青年技術者選考委員会（平成22年度）

委員長 設楽 貞樹／安井建築設計事務所常務取締役

委員 木多 道宏／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授

北村 隆／関西建築事務所理事設計部長

長谷川 孝／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授

吉田 文男／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授

太田 寛／清水建設大阪本店

桑原 進／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授

伊藤 昌明／日建設計設備設計部門設計長

井村 隆／清水建設関西支店建築設備設計部グループ長

宇城 英彦／大成建設関西支店建築設備管理室長

釘吉 敬／大林組本店建築生産技術部長

折衝中

設計課題 あなたのまちのデイサービスセンター

課題の趣旨

皆さんは高齢者の生活についてどの程度知っていますか。現在の日本はおよそ4人に1人が65歳以上の高齢者で占められ、今後もその割合は増加していくと予想されています。

一方家庭では、核家族化が進み高齢者のみの世帯も増えています。高齢者は仕事からの引退や子供の独立などによる社会的役割の変化、加齢に伴う運動機能の



最優秀賞牌

低下などによって、社会から孤立する傾向にあります。その中で、快適な通所サービスが受けられるデイサービスセンターの役割に期待が高まっています。

本課題では、まちの状況や高齢者の抱える問題について十分研究し、人々が楽しく集えるようなアイデアあふれるデイサービスセンターの提案を期待しています。

設計条件

- 敷地：敷地の大きさ・形状とも自由とする（ただし、特定の場所を考える）。
- 規模：延べ面積は自由とする（ただし、500㎡を上限とする）。構造・階数は自由とする。
- 所要室：提案趣旨にそった室とする（ただし、娯楽・食事・入浴・事務・調理（簡単なものでもよい）の室を適宜設ける）。

- その他：用紙や図面には、学校名・学年・氏名など応募者がわかるような表示は行わないこと。
※以上の条件に違反した応募作品は、失格とすることがある。

所要図面等

- 付近見取図：縮尺自由（周辺の環境や状況を簡単に示す）
- 配置図：縮尺自由（敷地と建築物・道路の関係、方位などを明示する）
- 平面図：縮尺1:100とし、1階平面図は配置図と兼ねてもよい。
- 立面図：縮尺1:100（2面以上）
- 断面図：縮尺1:100（1面以上）
- 透視図：設計意図が最も反映するところ（アイソメも可）。着色可。模型写真に代えてもよい。
- 建築概要：敷地面積・各階床面積・延べ面積・構造・階数
- 設計説明：設計趣旨（立地・周囲の状況等）についての説明を含む。サブタイトル（設計意図を表すもの）。
- その他：平面図・断面図には、室名・寸法を記入する。その他必要とされる図面は加えてもよい。

応募方法

- 別紙用紙に、学校名・所在地・学年・氏名を記入の上、封筒に入れ密封し、図面の裏に貼りつけること。（記入用紙が足りない場合は当会HP（<http://www.aaj.or.jp>）からダウンロードして下さい）
- 共同制作で応募する者は、1.の記入用紙に連名のうえ、代表者に丸印をつけること。
- 応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

平成22年9月30日（木）の消印をもって締め切る。

送付先

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号 OMMビル7階
社団法人 日本建築協会 第56回工高生デザインコンクール係
TEL.06-6946-6981 FAX.06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaj.or.jp URL: <http://www.aaj.or.jp>

応募条件

- 用紙：製図用紙A1判（594mm×841mm）1枚を使用し、その中にすべての要求図面を描くこと。
- 仕上げ：図面は黒色鉛筆仕上げとし、ワープロ、CG（透視図を含む）やCAD、スクリーントーンなどによる仕上げは禁止する。（ただし、色鉛筆による着色は可）
透視図は彩色用紙を用い、製図図面にのりづけしてもよい。
透視図や模型写真以外のものを貼りつけることや、図面のパネル化は行わないこと。
- 応募資格：平成22年4月現在、高等学校在籍の生徒で、個人ま

入選作品の数および賞

- 入選作品は10点とする。
- 入選作品のうちから最優秀賞1点、優秀賞2点を選ぶ。
- 最優秀賞作品には賞状および賞牌を贈り、優秀賞とその他の入選作品には賞状を贈る。
- 応募者全員に参加賞を贈る。
※入選作品の著作権は本会に属する。

入選者発表および表彰式

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌年1月号に掲載する。
表彰式は、平成22年11月13日（土）に行なう。

審査員（50音順・敬称略）

委員長 菅 正太郎／一級建築士事務所すがアトリエ代表
委員 飯田 匡／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻講師
伊藤 直幸／株式会社大林組本店建築設計部課長
上原 徹／株式会社日建設計設計部門設計室長
上羽 一輝／株式会社東畑建築事務所大阪事務所設計部主管
佐々木 栄／株式会社昭和設計執行役員都市・建築本部統括

長坂 大／京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
濱田 徹／鹿島建設株式会社西支店建築設計部長
細田みぎわ／Migiwa Hosoda Archi-Studio主宰
増田 俊哉／株式会社竹中工務店大阪本店設計部副部長
三浦 研／大阪市立大学大学院生活科学研究科准教授
三好 裕司／株式会社安井建築設計事務所設計部設計主幹

「建築と社会」誌

特集一覧 ●1988～2009

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日

本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。
取り上げてきた特集テーマは下記のと

おりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1988 vol.69	● ホテル物語	● 軟弱地盤と基礎 ● 文化と伝統—東海からの報告	● 設備におけるLCCとリフレッシュ ● 東海建築事務所作品集	● 建物の外装リフレッシュ*	● 都心居住	● 中国地方の展望とひろしまのまちなみ	● 21世紀への照明 *	● 制振*	● 超高層住宅を考える	● 集合住宅のリフレッシュ* ● 大阪府営舎	● 第35回 青年技術者 ● 800号記念*	● 讀賣テレビ
1989 vol.70	● 夢をのせる輸送設備	● リゾート事情 ● 竹中工務店創立90周年記念	● 色の復権 ● 東海の新建築と伝統技術*	● 省力化のための材料・工法	● まちづくりと法	● 博覧会とまちづくり	● 都市環境創造と設備I	● 建築とアート	● 構造の省力化 ● 鳥島建設大阪支店建築設計部作品集	● 都市環境創造と設備II ● ユーザー参加のハウジング	● 第36回 青年技術者	● 最近の博覧会 ● バビリオン
1990 vol.71	● 商品化住宅のデザイン*	● ニュータウン・ルネサンス	● 東海の都市景観 ● 住吉市文化会館*	● スケール感	● プレハブ住宅技術の現在と未来	● 国際花と緑の博覧会	● 建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	● 高度化—設計の多様化をめざして*	● やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	● 都市のナイス・プレイス ● 兵庫県営舎の歩み	● 第37回 青年技術者 ● 和歌山県の展望と景観*	● 高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	● 新しい都市空間づくり—I—	● オフィス・プレジャー ● 新しい都市空間づくり—II— ● 建築の風景	● 東海支部復活30周年記念	● 大阪東海上ビルディング	● 今、京都 ● 建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	● 建築と土木 ● 毎日放送本社ビル ● 近畿地方建設局営繕部	● 一般号*	● 建築をめぐるトラブルとその解決 ● 建設現場のイメージアップ作戦	● 空間のアイデンティティ ● きんでん写真集 ● 大建設計40周年	● 自治体住宅政策への提言 ● 大林組創業100周年記念	● 建築と土木—構造技術の世界— ● 第38回青年技術者	● スリムでタフなコンクリート ● 21世紀の住まいを考える ● シンポジウム
1992 vol.73	● 夢物語—人がかわる、まちがかわる—	● このどわりのインテリア ● 近畿の郵政建築15年の歩み	● 建築とデザイン —東海支部—*	● 建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	● 地球環境時代の建築	● 街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	● 本構造を使ってみませんか—集成材による構造—	● 接着—建築分野への限りなき可能性	● 中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」*	● 星台—仮設の魅力に学ぶ—ハウジングのメイストリームを探る	● いま建築教育に何が期待されているか	● 京のかたちと色
1993 vol.74	● 第39回青年技術者 ● 東海建築事務所創立60周年記念作品集	● 大阪府営舎	● 東海的美術館・博物館	● 市民劇場の舞台設備	● 環境—限りある自然と建築とのかわり	● 都市のスカイライン	● 映画の中のインテリア ● けいはんなプラザ・住友ホール	● 建築の再生—構造技術の役割—	● 国際的パートナーシップの可能性	● 福祉のまちづくり	● 都市型住宅再考	● 第40回青年技術者 ● 環境一人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	● コピー文化の新時代 ● 広島の前割りアジア競技大会	● 九州のインスタレーションと貌	● 伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈*	● 建築のエネルギーシステム	● 明日に向かって—会員作品—*	● いま、医療施設は	● 住空間における居どころへの視点	● まちなかの看板 ● 竹中工務店の集合住宅	● 水と建築 ● 日本建築総合試験所	● 建築設備のCGシミュレーション ● 村野、森建築事務所	● 構造美—建築の中の美 ● 集合住宅団地リニューアル	● 第41回 青年技術者 ● 関西国際空港
1995 vol.76	● 光がつくる風合の世界*	● 音—騒音から操音/制音へ	● 飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化*	● トイレから見た都市文化	● トイレ空間	● 接合 ● コスモタワー	● ユニバーサルデザインとは	● 私の空間作法—会員作品	● 新しい「都市・建築」の視点*	● 建築構造と社会の接点 ● 日建設計*	● ライフラインと建築設備*	● 第42回 青年技術者 ● 滋賀県建築課
1996 vol.77	● 阪神大震災から学ぶ*	● 大阪府住宅供給公社創立30周年記念*	● 遠江一その地方振興と文化*	● 立体駐車場設備 ● 大建設計	● 災害！非常時に生きる法体系 ● OAP Towers	● いま、プールがおもしろい	● マルチメディアが作る世界	● 最新の大型模 ● スポーツ競技施設の設備	● キーコンセプトの新時代	● 私の空間作法'96 ● 九州の元気 ● りんくうの3作品	● 第43回青年技術者 ● 近畿地建協本部	
1997 vol.78	● 建築のロングライフ化をめざして*	● 鉄ものがたり*	● 東海支部会員作品 ● 金沢・能登—風土・文化とまちなみ—建築*	● 創立80周年記念 ● 建築と私と社会—80人の眼—*	● 木造建築物の伝統技術とその継承	● 住む空間の復興—歩・緑の通利と新たな関係— ● 住都公園西支社	● 素材の不思議 ● 大阪ドーム	● 新エネルギー ● 住宅・都市整備公団改革への提言	● クロスワード ● 都市OSAKA*	● モザイク都市の住むかたち ● 昭和設計40周年	● 私の空間作法—会員作品—	● 第44回 青年技術者 ● 京都駅ビル
1998 vol.79	● 新しいまちづくりの予感 ● 東海建築事務所創立65周年	● Concrete ● 九州とわたし、そして建築	● 東海支部会員作品 ● 信州—諏訪とその周辺—	● 街並みの演出—最近の外構材料	● 生活環境の安全・安心	● 地球環境保全と建築	● 心と体を元気にするインテリア	● 建築設備—ビルメンテナンスの立場から	● 建築への証言'98—21世紀に向けて	● ゆれをとめる—たえざる技術からかわす技術へ	● 私の空間作法 ● 2001年の医療施設	● 第45回青年技術者 ● 駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	● “らしさ”のデザイン ● 建築を結ぶ小粋なモノの仕掛人	● 大阪市都市整備局	● 東海支部会員作品'99 ● 北信濃—街並み・修繕と地域文化の再構築—	● 都市のパブリック	● 関西建築界の流れと東海三つの足跡をたどる	● 改正建築基準法—まちづくり、すまいづくりへの展開—	● 改正建築基準法—まちづくり、すまいづくりへの展開—	● 私の目とみた環境問題	● アーバンインテリ—都市空間としてのインテリア	● 木とともに	● 私の空間作法	● 第46回 青年技術者
2000 vol.81	● 21世紀のデザインの動向を見る ● 安井建築設計事務所創立75周年	● 中国支部—いまの海と中国地方の街づくり—	● 東海支部会員作品2000 ● 富山—富山—地域の風景と新たな街づくりの流れ	● ところを癒す環境デザイン	● 蓄る—測定方法と測定結果が意味するもの—	● スケルトン&インフィル	● 現代の日本 ● 文化を探る	● 100年後へのメッセージ ● 日建設計創業100周年	● 来世紀に引き継ぐべき、もの、ここ—	● 時間	● 私の空間作法—会員作品— ● 21世紀の高齢者の居住環境	● 第47回 青年技術者
2001 vol.82	● エヌ・ティ・ティファシリティーズ	● 21世紀の建築設計教育	● 東海支部会員作品 ● 岐阜・大垣	● I T 社会におけるきずな	● 自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	● 成熟社会をささえるまちづくり	● 現代の日本 ● 文化を探る	● 環境—近未来に向けて今できること— ● 大建設計—作品特集1996—2001—	● 建築の力 ● 都市の力	● 緊要 ● 都市基盤整備公団関西支社	● 私の空間作法—会員作品— ● NKK大阪放送会館・大阪歴史博物館*	● 第48回 青年技術者 ● 第50回青年技術者 ● 大阪中央公会堂
2002 vol.83	● 国土交通省近畿地方整備局営繕部*	● 再生・リサイクル	● 東海支部会員作品 ● 愛知・名古屋	● 生活環境の安全・安心—パート2—	● 塗装のいろいろ	● 都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	● いま、インテリアデザインは ● 清沢リバープレイス	● 建築をささえるセンサー	● 建築とボランティア	● 時を超えて—サステナブルエンジニアリングの現在—	● 私の空間作法—会員作品—	● 第49回 青年技術者 ● 大阪市中央公会堂
2003 vol.84	● 東海建築事務所創立70周年	● 九州の地域づくり・まちづくり	● 東海支部会員作品2003 ● 愛知・名古屋—この地の文化、芸術と建築、街づくりを考える—	● サステナビリティ—次世代に引き継ぐ都市・建築、暮らしのデザイン—	● 建築と五感	● 都市計画法及び建築基準法等の改正	● コンバージョン—インテリ—アから発信するまちのみ—	● 介護と建築・設備	● 建築とノスタルジー—建築の主観的価値について—	● 力と楽しさ ● き合う方法	● 私の空間作法—会員作品—	● 第50回青年技術者 ● 第51回青年技術者
2004 vol.85	● 大阪市住宅局	● 都市緑化	● 東海支部会員作品 ● 愛・地球博*	● 省リスクな「まち再生」*	● リニューアルの技	● 地域住民主体のまちづくりと支援制度	● Product Design+1	● 銭湯—心地よさを求めて—	● 建築家とは何か	● 巨大地震にそなえて	● 私の空間作法—会員作品—	● 第51回 青年技術者
2005 vol.86	● 震災から10年	● 「健やか」 ● 長崎医療センター	● 東海支部会員作品2005 ● 東海における施設づくりへの新たなまなみ	● 建築の経済化	● 住まい方の変化	● 人工栽培	● 次世代に伝える「木」の建築 ● 「建築と社会」1000号記念	● 改正建築基準法と景観緑三法	● 火災から守る	● 構造の過去から未来へ*	● 私の空間作法—会員作品—	● 第52回 青年技術者
2006 vol.87	● 都市環境デザインと参加のまちづくり	● 「地方空港の時代」—まちと共存する空港づくり—	● 東海支部会員作品2006 ● 十東海支部特集3部作*	● 都市再生の本質—光と影のはざま—	● 変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	● 身近な省エネルギー—エネルギーをたくわえ、有効利用する—	● 設計図が伝えるもの	● 建築物の安全・安心*	● 第53回 青年技術者	● 「セキュリティ」	● もしも… ● 構造が未来へつなぐ夢—	● 私の空間作法—会員作品—
2007 vol.88	● 光り輝く京都の景観まちづくり	● 学校新時代	● 東海支部会員作品2007 ● 十東海支部特集3部作	● 創立90周年記念—この10年、これからの10年—	● あそび考	● このどわりの設備と空間の移り変わり	● 住まいの設備と空間の移り変わり	● 建築系雑誌が伝えるもの	● 建築基準法等大改正	● 第54回 青年技術者	● ガラスを考える	● 楽しい構造の世界
2008 vol.89	● 私の空間作法—会員作品—	● PFI事業、その後	● 東海支部会員作品2008 ● 十東海支部特集3部作	● まちづくり2011年宣言	● 新ホテル物語	● 設備に役立つ地震対策	● 中国地方を訪ね歩いて見ると ● 小林聖心女子学院	● 建築と景観	● 第55回 青年技術者	● 木造住宅を巡って	● 建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	● 自然と戦う構造
2009 vol.90	● 私の空間作法—会員作品— ● 近畿電力 中之島第一 ● 阪神中島新時代—	● 水の都にぎわいのある未来に向けて	● 東海-TOKAI ● オムニバス	● 楽しい福祉	● 体感するインテリア	● 建築空間をめぐる空気環境（空気質）	● 建築と水	● 実用レベルで展開される施工管理のIT化	● 第56回 青年技術者	● 地域の歴史を大切に ● 活きたまちづくり	● 第16回 会員作品特集 ● “私の空間作法”	● 構造家日記—顔の中をのぞいてみた—

*は欠号

建築と社会

Architecture and Society

2010

No.1057

日本建築協会

4

■特集予告

5月号／ホスピタリティのあるケア空間

6月号／太陽光発電

編集委員会(平成21年度)

■副会長 豊 孝治
井上 孝治
■編集担当理事 上原 正行
木戸 徹
佐藤 栄一
佐藤 美子
○設案 貞樹 統一
竹中 良三
立成 孝祐
松村 英祐
吉村 吉祐
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
△飯田 匡
飯沼 清明
鈴木 清彦
田中 慎治
田中 直人
田中 昇平
紅谷 奈緒子
松田 三郎
三宅 吉村
守井 英祐
吉村 宏之
★建築計画系
荒木 朋孝
奥村 忠司
菅野 嘉也
神戸 彩子
木桶 敦夫
桶 茂夫
下坂 千夏
所 隆史
野田 健一
桃井 江
松森 藏史
米山 剛史
★インテリア・住宅系
小倉 一平
加藤 浩司
△神谷 亮
黒柳 浩介
田中 賢一
戸井 史子
間瀬 博
■構造分科会
秋田 智三
石田 大平
△岸本 光平
小芝 淳一
志摩 好宣
瀧野 敦夫
角田 耕一
難波 尚
房智也
松村 健一
向井 洋一
○委員長
○副委員長
△幹事

印刷 2010年3月25日
発行 2010年4月1日
発行人 社団法人日本建築協会
発行所 社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電話 06-6946-6981
振替口座 00910-9 39975
印刷所 株NPCコーポレーション
定価 1200円(税込)

Journal of the Architectural Association of Japan

特集●食と建築・都市

大阪が培った料理と料理屋文化●笹井良隆	12
食とまちづくり～ケーキ立国につぼん～●三宅正弘	14
食べられる景観づくり●糸長浩司	16
まちおこしに活かすB級ご当地グルメのマーケティング戦略●渡邊英彦	18
クラインガルテン方式での田舎暮らし支援の取り組み●真弓憲吾	20
“食空間”を中心とした住まいへの転換●内田青蔵	22
日本のライフスタイルとキッチンの変遷●黒田 潔	24
はやる飲食店のデザイン●今福彰俊	26
ガスビル建築と食文化活動●山下満智子	28
電化調理機器の導入による店舗設計の自由度の向上●関西電力株式会社本部営業計画グループ	29
パリの食の風景～見る・見られるの関係～●松田奈緒子	30
関西の食の風景●飯田匡・三宅次郎・田中直人・守井辰・松田奈緒子・紅谷昇平	31

会告 続大阪「かくれたええところ」再発見コンクール入選者決定。「上本町YUFURA」見学会予告。若き創造者たちへー第57回青年技術者特集号」へのおさそい。第56回工高生デザインコンクール。

作品作風	堺市立 サッカー・ナショナルトレーニングセンター	6
研究の風景	環境図形科学研究室●大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻	8
gallery	GREEN WALLのある家●藤枝 寛	10
法令コーナー	建築行政共用データベースシステムの供用開始●久保博史	33
設備の頁	超耐候性 4 フッ化型遮熱塗料ゼッフル TM 遮熱工法●村井俊子	34
再読	大阪市立美術館●植松清志	35
関西近代建築		
関西の建築界	橋爪紳也●根木和人	39
群像		
information	こども環境学会大会〔広島〕、(社)都市住宅学会関西支部2010年度総会記念講演会、都市生態系ネットワークづくりへー「名古屋 蝶の飛ぶまちプロジェクト」スタート～、屋上開発研究会大阪支部「関西さきがけ賞」作品募集、没後400年特別展覧会「長谷川等伯」、韓国の民画と絵本原画展「民画と絵本の出会い」、鴻池コレクション展「名品展、写真家 中山岩太『私は美しいものが好きだ。』レトロ・モダン神戸」、大阪歴史博物館「遺跡から見た奈良時代の大阪」、エドソンコレクション初帰国「柴田是真の漆×絵」、「冷泉家 王朝の和歌守展」、「ルノワール―伝統と革新」国立国際美術館で、市民と美術館の対話を!	40

月間の動き	平成22年2月分	44
-------	----------	----

本文 デザイン 高橋善丸

今月の表紙

企画 間瀬一博 企画・写真・デザイン 花城辰男

～都市のムード～

中心市街地において、広大な規模で近代文化遺産の保存に取り組んでいる旧居留地は、明治以来、戦争・震災などいくつもの困難を乗り越えています。現代の日本人にも受け継がれているその原動力は、日本人の「外国への憧れ」、或いは、「エキゾチックな眼差し」ではないでしょうか。(間瀬一博)

神戸市 旧居留地



設計・監理 ■
昭和設計

施工 ■
大林・西武・花谷・大谷建設工事共同企業体

堺市立 サッカー・ナショナルトレーニングセンター

堺市の臨海部、大和川南岸に整備された、国内最大規模のサッカーのナショナルトレーニングセンターであり、サッカーのみならず市民のスポーツ・レクリエーションの振興とスポーツを通じた各種交流の拠点形成を目指した施設である。

サッカーフィールド14面、フットサルフィールド8面を有し、メインサッカーフィールドには約3,000席の観覧席を併設している。フットサルフィールド3面を収容する屋内フットサルフィールドはサッカーのハーフコートにも対応する大スパンを実現している。

臨海部に立地することから、建物の高耐候性を図るとともにコンパクトで単純な形状とすることにより強い日差しや潮風の建物への影響を軽減している。

施設の中核となるクラブハウスは内部空間のボリュームが拮抗したキューブとして外観に現れ、サッカーのダイナミズムを体現している。

広大な天然芝フィールドの散水やトイレには下水再生水を利用し、舗装面積の60%超、約50,000㎡に透水性舗装を採用するなど、環境にも配慮した施設となっている。

(加藤俊郎・岸田雅彦/昭和設計)

所在地——堺市堺区築港八幡町

開設面積——35.4ha

建築面積——10,620㎡

延床面積——13,653㎡

構造規模——S+RC 2F

工 期——2008年 8月～2009年12月

施設内容——サッカーフィールド（天然芝5面、人工芝9面）
フットサルフィールド（人工芝8面）、スポーツ広場
クラブハウス、ロッカーハウス（4棟）、スタンド等

最 寄 駅——南海本線 七道駅

撮 影——村岡彰年



クラブハウス



クラブハウスエントランスホール



ロッカーハウス



フットサルフィールド

研究の風景

大阪市立大学大学院工学研究科
都市系専攻

環境図形科学研究室

■研究室の沿革

1949年に設置された大阪市立大学理工学部は、教員の任期制、研究費の傾斜配分、学部一体の入試（在籍学科は卒業時に定まる）など、当時としては先進的な特徴を持っていた。また、一般教養科目と専門科目の均等性・平等性を確保するとの観点から、大学全体として組織名としての教養部は存在するものの、一部の例外を除き教養部専任の教員は存在せず、教養教育は各学部の教員が兼担してきた。このため、大阪市立大学における図学（現在では図形科学）教育も、後に建築光環境工学の大家となる都島工業専門学校（理工学部の前身）の伊藤克三教授（後に理工学部に移籍）が理工学部に出向する形で始められた。

その後、図学講座は建築学科の建築衛生、建築史、建築計画、都市計画のスタッフが兼担する形をとりながら、工学部と理学部の分離（図学講座は工学部に所属）、他講座から独立を経て、1999年に工学部に環境都市工学科が開設された際に、図学講座のスタッフ（三木信博教授、西岡真穂講師、鍋島美奈子助手）は新学科の地域環境計画講座に移った。そして、2000年に工学部共通応用数学講座の中の図形科学担当講師として鈴木広隆が着任し、環境図形科学研究室としての活動を開始している。このように、環境図形科学研究室は厳密には応用



図1 研究室メンバー

数学講座の一部であるが、建築学科、環境都市工学科からの学生を受け入れながら、他講座と同様に研究教育活動を行っている（現研究室メンバーの写真を図1に掲載）。

（スタッフの肩書きは当時のもの）

■教育活動

開設当時から実質的に教養部が存在しなかったとはいえ、環境図形科学研究室においては、一般教養科目である図形科学の担当は活動の大きな柱である。建築学科、都市学科（2008年度までは都市基盤工学科と環境都市工学科）、情報工学科、電子・物理工学科、生活科学部居住環境学科に図形科学関連科目を提供しているが、カリキュラムへのCAD・CGの取り入れは早く、三木信博教授の時代に、フリーウェアを組み合わせたCG教育を実現している。フリーウェアPOV-Rayを用い、電子メールやWebを用いて作品提出や提出作品の確認、質問への対応などを行うスタイルは現在でも引き継がれており、受講生が制作するレベルの高い3DCG作品はWebで参照可能である。

<http://graphics.arch.eng.osaka-cu.ac.jp/zukeikagaku/>

図形科学は、ものづくりのための図作成の技術・知識を身につける教育であると位置付けられることが多いが、本学では、図を介してコミュニケーションを円滑にするための技術・知識であると位置付け、語学や情報処理技術と同様、幅広い受講生に対して有用な授業となることを目指してい

る。このため、地理情報システムを用いて図形を定量的に分析する演習の導入（2003年度）、照明器具をCGで制作する課題（光や陰影を意識するため）の導入（2004年度）、データ記述型のモデラーを用いてアニメーションを制作する課題の導入（2006年度）、幾何学を用いてモデリングを行う演習（2006年度）など、「図を使いこなす」技術・知識を身に付けることを念頭にカリキュラムを少しずつ改良している。また、これらの教育の延長として、大学院修士課程における演習で、都市景観のレンダリング画像作成の導入（2003年度）や、画像処理による都市景観画像の分析の導入（2005年度）なども行っている。本研究室の学生も、TA等としてこれらの教育活動に積極的に関わってきた。

■研究活動

本研究室の研究活動は、「図形科学的アプローチによる建築・都市空間の構築と分析」というテーマで、「A：建築・都市空間の形態の構築と構築手法の開発」、「B：建築・都市空間の形態に基づく物理環境の算出及び分析」、「C：建築・都市空間の形態に基づく物理環境と心理応答との関係の分析」という3つの切り口で様々な検討を行っている。

Aでは、モデラーのインターフェースの開発などとともに、大学院の演習などとも連動させながら、まちづくり活動支援のための簡易景観シミュレーションシステムの開発、GISとWebを活用した景観データベースの開発、レンダリング画像を用いた住民主導型まちづくり活動の支援（図2参照）などに取り組んでいる。

Bでは、照度輝度などのシミュレーション、光の流れの分析、可視性の分析などを行っている。図3は、兵庫県小野市の浄土寺浄土堂において、如来像の顔面が発光するメカニズムを分析した際の図である。また、図4は大阪市住吉区におけるひたたくり発生状況と道路ネットワークにおける可

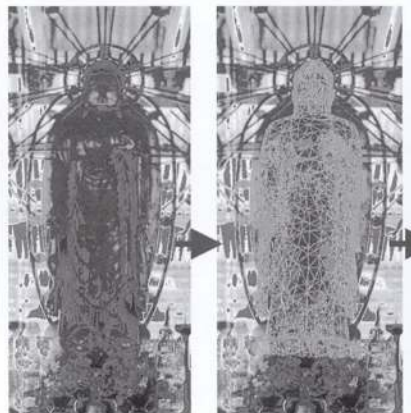


図2 景観レンダリング画像演出のサンプル

図3 浄土寺浄土堂如来像

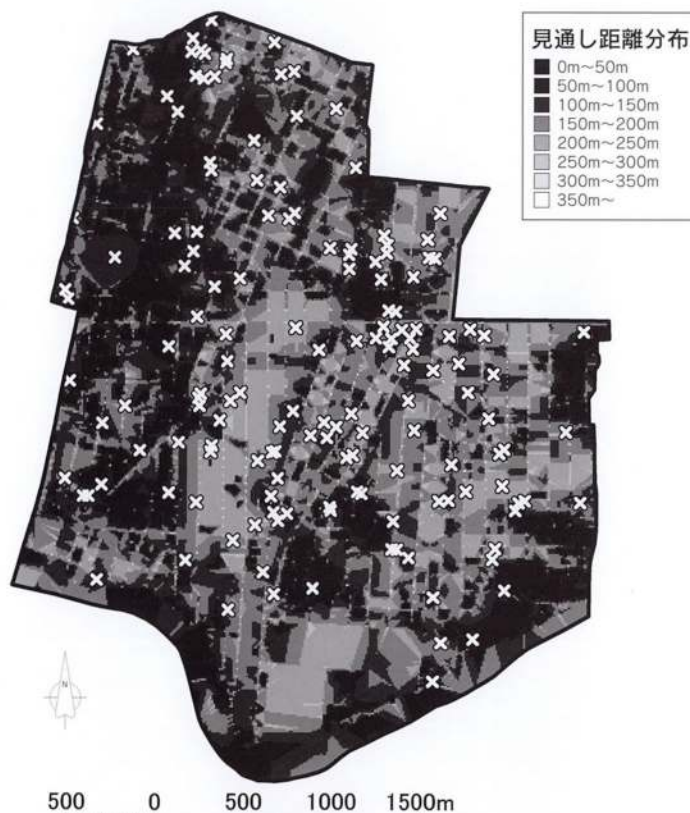


図4 道路ネットワークにおける可視性とひたつき発生位置

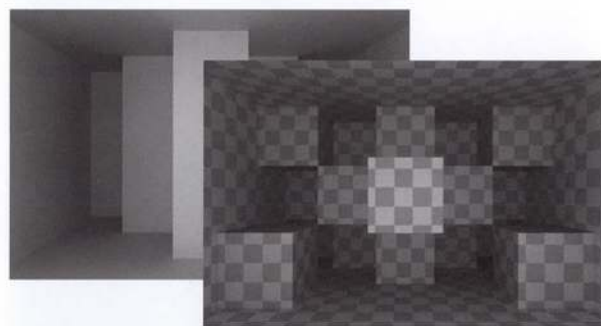


図5 立体視研究

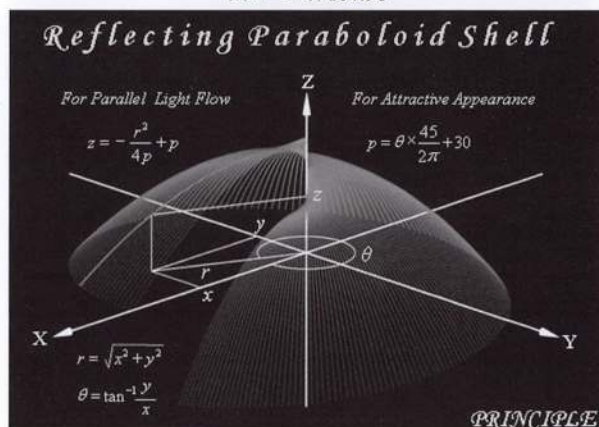


図6 放物線集合による面のリフレクター

視性との関係性を分析した際の図である。物理環境の分析は、現実空間を対象にしたものから、設計段階の空間や仮想空間を対象としたシミュレーションまで及んでいる。

Cでは、様々な照明パターンによる光環境の心理評価、様々な座席パターンによる車輦空間における心理評価など、仮想空間をCGで作成して評価を行うことが多い。図5は、立体視システムにおいて、対象とする空間の形状の複雑さ、テクスチャー、及び瞳孔間距離を変化させた場合の立体感の変化を分析した際の被験者実験に用いた図である。

このように、研究活動では形態と光環境に関連したテーマが多く、研究室を志望する学生もこれらに関心の高い学生が多い。このため、卒論生の研究テーマが固まる前の時期に、ゼミ旅行として瀬戸内海の直島を訪れ、南寺や地中美術館など視覚に密接に関係する作品や空間を体験することが恒例となっている。

■ものづくり活動

教育活動の欄で、大阪市立大学における図形科学教育が、ものづくりだけに限らずより幅広い範囲をターゲットにしていることを述べたが、やはりものづくりが図形科学教育の目的の大きな柱であることは間違いなく、また研究室を志望する学生の関心も高い。そこで研究室では、2007年度より3Dモデリングシステムと積層造形システムを活用したものづくり活動をスタート

した。3Dモデリングシステムは設計段階におけるものづくりの制約を取り払った（どんなに複雑な形でも設計できるようになった）が、その後に残った造形段階における制約は、積層造形システムの出現により克服された。本研究室では、この2つのシステムを用いてこれまで見ることでできなかった形状を設計・造形し、この形状による性能を評価するというスタイルを新たに加え、研究活動のA、B、Cと連動させている。図6は、焦点を共有する放物線の集合により構成された曲面で平行光を実現するリフレクターを設計したものであり、これは実際に造形した上で鏡面塗装を施し、反射性能の評価も行っている。

■おわりに

図形科学は図形に関わることすべてが研究対象であるため、建築・都市よりも幅広い枠組みである。しかし、受け入れる学生の所属が建築・都市を専門とするため、建築・都市との関連は意識せざるを得ない。建築学的には、計画、構造、環境の3つの大きな柱があり、多くの研究室はこのどこかに属するものであるが、環境図形科学研究室としては、複数の学科に跨る複雑な位置付けや、教員1人で運営している身軽さなどもあり、計画と環境の中間から両方をにらむような立ち位置で今後も活動を行って行きたいと考えている。

なお、本稿に掲載した図の出典は下記の通りである。

- ・鈴木広隆他／レンダリング画像を用いた住民主導型まちづくり活動の活性化に関する研究／日本建築学会技術報告集第19号、pp.279-283、2004年6月
- ・鈴木広隆／地理情報システムを活用した図形科学教育への図形解析導入の試み／第5回建築教育シンポジウム論文集、pp.69-74、2005年1月
- ・坂田暁洋他／図形科学的手法による浄土寺浄土堂内の光環境の分析／日本建築学会環境系論文No.603、pp.17-23、2006年5月
- ・辻雄太他／両眼立体視における立体感の支配要因に関する研究—瞳孔間距離、テクスチャー、図形の複雑さの立体感への効果—／日本建築学会環境系論文No.605、pp.111-117、2006年7月
- ・鈴木広隆／照明器具デザイン課題の導入による図形科学教育へのインパクト／日本建築学会技術報告集第13巻第25号、pp.321-326、2007年6月
- ・鈴木広隆／景観調査と画像処理を用いた景観誘導ルール提案のための演習／日本建築学会建築教育研究論文報告集No.8、pp.31-36、2008年1月
- ・石川愛他／道路ネットワークにおける見通し距離とひたつき発生との関係に関する研究：大阪市住宅系地区を対象として／日本建築学会環境系論文No.623、pp.101-106、2008年1月
- ・鈴木広隆／Reflecting Paraboloid Shell、日本図学会第3回デジタルモデリングコンテスト優秀賞

(文責：鈴木広隆)

まち 建築 ひと

gallery

GREEN WALL の ある家

建築家

藤枝 寛

旗竿敷地により四方を建物に囲まれる環境であるが“緑と開放感のある家”を考え、庭を立ち上げた“緑の壁”＝GREEN WALLを核とする住宅を構築した。

有孔折板にツル性の植物を上下から密生させたGREEN WALLをもつテラスを2階南面にキャンティレバーで張り出した。

この“緑の壁”はリビング側だけではなく、隣地側にも同じ表情を見せている。GREEN WALLはプライベートな庭であり、都市に向かった共用の庭でもあるのだ。

また、トップライトにより部屋全体に柔らかな光を取り込み、季節の移り変わりを感じたり日々の天候の変化や雨音を楽しむ。

建築と一体化したグリーンや光の環境は都市での生活に潤いと安らぎを与える。

藤枝 寛 (ふじえだ ひろし)

1970 兵庫県生まれ

1993 大阪芸術大学芸術学部

環境計画学科卒業

～船場設計事務所

2000 design Fresco

一級建築士事務所

<http://www.design-fresco.co.jp>

現在に至る

企画編集 豊田充広(作品作風小委員会)



特集

食と建築・都市

「衣食住」という言葉がありますが、「住（建築）」と同じく、人が生活する上で基盤となる「食」は、昔から建築やまちと深い関係がありました。住宅の計画において食は常に重要なテーマでありましたし、近年は様々な地域で食をテーマとしたまちづくりが実践されています。

一方で、これまで育まれてきた伝統的な食文化や、B級グルメに代表されるような新しい食文化に関する理解を深めることは、今後の食と建築のあり方を探る上でも重要ではないかと考えます。

いずれのテーマについても、これまでに多くの議論がなされましたが、本特集では、あらためて「食と建築」にまつわる様々なテーマを横断的に取り上げることによって、これからの食と建築のあり方を考える上でのヒントとなるような特集にしたいと考えています。

計画系分科会幹事●飯田 匡

大阪が培った料理と料理屋文化●笹井良隆

食とまちづくり～ケーキ立国にっぽん～●三宅正弘

食べられる景観づくり●糸長浩司

まちおこしに活かすB級ご当地グルメのマーケティング戦略●渡邊英彦

クラインガルテン方式での田舎暮らし支援の取り組み●真弓憲吾

“食空間”を中心とした住まいへの転換●内田青蔵

日本のライフスタイルとキッチンの変遷●黒田 潔

はやる飲食店のデザイン●今福彰俊

ガスビル建築と食文化活動●山下満智子

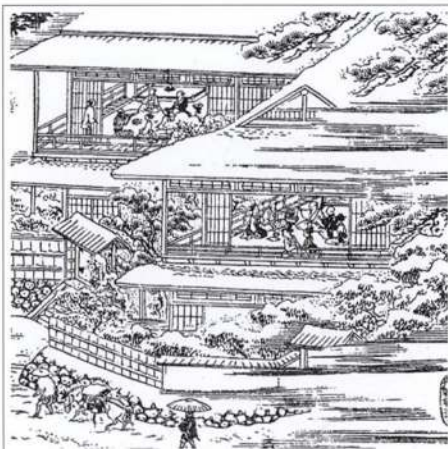
電化調理機器の導入による店舗設計の自由度の向上●関西電力㈱お客さま本部営業計画グループ

パリの食の風景～見る・見られるの関係～●松田奈緒子

関西の食の風景●飯田匡・三宅次郎・田中直人・守井辰・松田奈緒子・紅谷昇平

本特集企画担当：計画系分科会

飯田 匡／飯沼清明／鈴木克彦／田中直人／紅谷昇平／松田奈緒子／三宅次郎／守井 辰



雪の浮瀬亭（「摂津名所図会」）

大阪が培った 料理と料理屋文化

NPO法人 浪速魚菜の会代表理事
大阪食文化専門誌「浮瀬」編集長
大阪料理研究会事務局長

笹井良隆

わが国における料亭の元祖は大阪四天王寺「浮瀬（うかむせ）亭」といわれる。かつては門前の茶屋であった「浮瀬」が、はたしていつから料亭と呼ばれるようになったのか。料理屋の形態は様々あるが、何をもって料亭というのかをまず考えてみたい。そのためには会席料理の濫觴（らんしょう）を迎える必要があるだろう。

平安時代には、京の貴族らが食べていた「大饗（饗宴）料理」があった。次に南北朝から室町時代にかけて幕府に仕える武家の力が拡大するとともに、料理も朝廷に仕える公家らスタイルに代わって、武家儀礼の中で、式三献からはじまる「本膳料理」が整った。宮廷料理儀式であった包丁式もまたこの時期に公家の四条流、武家の大草流という構図ができあがることになる。

次に、こうした儀礼としての料理とは別に、寺院の食礼として、京都では地域性を生かした「精進料理」が確立。さらに茶の湯からは「懷石料理」が生まれた。茶道が京で独自の発展を遂げると懷石料理はより洗練され、大饗料理や本膳料理の伝統と精進料理の調理法なども組み入れられた。こうした流れを汲み、京阪では一般の宴会料理である会席料理が様々な形を変えながら普及することになる。

■「浮瀬」がつくる文化と料理

会席とは、もとは俳席からスタートしたものとされている。寛永六（1629）年に松永貞徳の門人である山本西武なるものが京の二条寺町妙満寺で百韻興行（百の句を読み連ねる連歌形式のイベント）を催したのが最初だとされている。当初は会の終わりに酒を酌み交わす程度であったが、元禄を迎える頃には、次第に句会中に酒を飲み食事をするようになっていた。まさにこの頃に誕生したのが「浮瀬」だと考えていいだろう。実際に、大阪の浮瀬亭では芭蕉や蕪村といった俳人らを招いての連歌または俳諧の席が頻繁に催されている。元禄七（1694）年には松尾芭蕉が「浮瀬」で半歌仙を巻いたことが記録に残っているので、ちょうどこの頃が茶店から料亭への変貌期であったことが推測できる。料亭はただ飲食するだけの場ではない。料亭は商都・大阪にとってなくてはならない商談を成立させる場であり、文化に触れる場であった。だ

からこそ料理には、それにふさわしい「しつらえ」も求められてきた。

「浮瀬」というのは何とも妙な屋号だが、じつはこの名は、料亭で使われていた巨大鮑の貝杯の名に由来している。直径が約60センチもあり、なみなみと酒を注げば一升弱は入った。この料亭で浮瀬杯を所望し酒を飲み干した客は、その名を記帳することができた。これが大いに話題となり、いつしかこの料亭の名そのものが「浮瀬」となってしまった。さらにこの料亭では漆杯「七人狸々」を作らせている。この杯は何と六升五合もの巨大杯。糸底（いとどこ）だけで一升入ったといわれている。当時の文化人を京阪から招いては歌会を催す、酒席を盛り上げる大杯の趣向を用意する、記念に記帳できる仕掛けでリピート客をつくる。浮瀬亭の主とされる四郎右衛門の商才には驚かされるばかりである。大阪の地の利を生かした山海の美味を提供し、人を集わせ、もてなし、楽しませる。これこそが料亭といえるのではないだろうか。



浮瀬の奇杯
（「摂津名所図会」）

「浮瀬」の繁盛ぶりは次第に全国にも轟きだしたようで、宝暦年間（1761-1770）の後期には京都に同名の料亭ができ、さらにその十数年後には江戸にも「浮瀬」ができているが、いずれも十数年ほどで店を閉じている。京都では「浮瀬」を真似た店は経営的にはだめだったようだが、同時期に「浮瀬」の代わりとっては何か、生間流の式包丁などで有名な萬亀楼が料亭として営業を始めている。

京と大阪は短時間に行き来できるものではなかったが、当時から京と大阪の文化交流はかなり進んでいたことが分かる。となれば料亭も京阪でそれぞれに楽しみ方があったに違いないだろう。京都と大阪とでは同じ料亭であっても会席料理のスタイルが違っていたこ

とは推測できる。京では川魚の生洲(いけす)料理はあったものの、大阪のような海魚料理は京の料理のジャンルではなかった。京都では鮮度を楽しむ料理というよりも、入手・保存可能な食材をいかに料理し、美しく見せるか。そういった意味でいえば京料理とは、大阪料理とは違った「工夫の料理」であったといえるだろう。栄華を極めた「浮瀬」であったが、江戸中期にはかなり衰退しており、明治後期に営業をやめている。織田作之助の父親が「浮瀬」の調理場で働いていたようで、作之助が父に会うため「浮瀬」を訪れている。

■福屋宴席

さて、少し形式を重んじる浮瀬が疎んじられ、大阪庶民は気軽に楽しめる料亭的な料理屋を求める時代となった。そのようなニーズから正徳元(1711)年に大阪に誕生した料亭が「福屋宴席」であった。浪華百事談という明治頃に書かれ浪速の事柄を随筆風にまとめたものの中に、福屋宴席のことが記されている。それによると、「一心寺の少し北側に、近年まで福屋又平という料理店があった。この店の歴史は古く、正徳元年の開業と聞く。その庭が素晴らしく、芝生に噴水をつくり天神山を再現したかのような名庭が評判であった。開業当時は客も多く繁盛していたが、次第に衰えて近年(江戸後期と思われる)廃業した。この店では例年晦日にご最良筋に大きな年始の札を配り、また歳暮として天王寺蕪を干したものを贈っていた。ちょうど乾物店で売っている干蕪と同じものだと思う」。福屋宴席については南木芳太郎氏が編纂した『上方』にも書かれており、それによれば「浮瀬」ほど堅苦しくなく、大衆が気軽に利用できる料亭であったことがわかる。

もうひとつ、同じ上町台地で大阪湾を一望できる料亭として知られていたのが「西照庵」。この料亭も泉が湧き出る庭が評判であったようだ。場所は天王寺区生玉町、ちょうどその跡地に現在の大阪夕陽丘学園高等学校が建っている。「浮瀬」の跡地に大阪星光学院が建っていることを思うと何とも面白い。

■仕出し屋から料亭へ

これら料亭と世代交代するかのように大阪

では明治から大正にかけて、天保年間頃に仕出し屋から料亭となった店がいくつも開業している。「なだ万」「つる家」「花外楼」「はり半」などがそうで、大阪平野町の「堺卯」は寛政二(1790)年と少し古い。「なだ万」の開業は天保元(1830)年。初代灘屋萬助が料理屋から始めた。料亭となったのは大正時代からで、昭和30年代頃まで大阪の今橋で営業を続けていた。その後に東京灘萬と合併、現在に至っている。「つる家」は今では大阪ではなく、京都岡崎の店が残っているが、大阪本店の盛時には「商工会議所の別館」と呼ばれていたほど関西の財界人が利用していたといわれている。「つる家」の創業者である出崎鶴吉氏は、11歳で北新地の鰻屋に、その後は江戸堀にあった料亭「樋田」で修行を重ねた。樋田には政財界の常連客が多かったが、誰もが鶴吉の料理に魅せられた。独立を決意した鶴吉は最良筋から金を借り受け、北浜五丁目に「つる家」を開業。鯛の頭の山椒焼きを店の名物としながらも、残った鯛のアラを店先で売った。当時は、勢いのあった大阪料亭が次々と京都や東京に支店を持ち始めた時期であり、これにより大阪ならではの料理が次第に各地へと広まることともなった。

さて、昭和を迎える大阪の料理界で欠くことのできない人物がいる。それが、「吉兆」の創業者である湯木貞一氏だ。昭和5年、湯木氏が30歳の時に、大阪の新町に暖簾をあげたのがはじまりである。間口が2メートルに満たない小さなこの店は、当初は鯛茶漬を食べさせる専門料理店であった。けれど、松平不昧公の『茶会記』を読み茶道に傾倒するようになった湯木氏は季節感と茶心をふんだんに盛り込んだ独特な日本料理を志向するようになっていった。島之内時代の「吉兆」



じつはこれが当時の時代を先取りするひとつのスタイルでもあったと思われる。というのは、これまで大阪の商家では得意先へのもてなしは自宅が主。料理はすべて仕出し屋が担っていた。しかし大正から昭和に移り、商家は企業となり、取引先が増加。自宅での接待が難しくなり、自宅ではなく外になじみの

料理屋をつくり利用するようになった。「なだ万」「堺卯」「丸水」など仕出し屋がこうしたニーズを受けて料亭や料理屋へと移り変わっていったのもこの時期だ。もちろん接待に使われたのは大きな料理屋ばかりではない。島之内の頃の吉兆をはじめ、樋之上町の「いせ半」、心斎橋の「つる源」、今橋の「いせや」など専門店のながらもこだわりの日本料理を出す料理屋が次々と誕生してきたのである。しかも大きな料理屋と勝負するためには板前の包丁さばきに加えて茶趣味など、接待に使っていただけるに相応しい文化度の高さも要求されたことだろう。まさにその先端を走っていたのが吉兆だったのではなかろうか。吉兆は昭和12年に新町から昼屋町へ店を移すが、翌年には戦争勃発。大阪料理界にとって戦禍は甚大なものとなった。

■カウンター割烹

最後に、様々な形態の料理屋を生んできた大阪だが、中でも大正期に出現した『カウンター割烹』ほど、大阪らしいものはないといえるだろう。大正13年に、新町にできた「浜作」では、客の椅子をあえて少し高くしてあり、板前の手元を観ることができるよう趣向が施されていたといわれる。大阪湾とそれに連なる瀬戸内の新鮮な魚介。肥沃な河内平野の野菜を使って、店主が見事な包丁さばきで魚介を割(さ)き、相方が野菜を烹(に)るのである。口だけではなく目でも楽しませる、それが関西割烹の真髄であった。「浜作」はその後に、京都の祇園へ移り営業を再開しているが、昭和の初期には包丁兄弟であった一人が南地で「濱作」を開店している。これはお座敷の中に、カウンターを設けたもので、客は料亭のように座敷に座りながら、板前の華麗な技をカウンター越しに観ても楽しむことができるというユニークな店であった。

こうした大阪ならではの店も、先述のようにすべて戦禍の犠牲となってしまった。現在の日本料理の礎を築いた大阪の料理界がこれほどまでに衰退してしまった最大の要因は戦争であった。趣向をこらしたしつらえ、貴重な器の数々。いったんこれらを失ってしまうことは、料理屋にとっては致命的なことであったといえるだろう。(ささい よしたか)

遊山箱の
工作教室



自分でつくっ
た遊山箱で
お花見に

食とまちづくり

～ケーキ立国につぼん～

武庫川女子大学生生活環境学部
生活環境学科 准教授

三宅正弘



遊山箱を見直すために
開催した会 2006年

■ケーキ365日

ケーキを毎日365日、お寿司屋さんで寿司を連続100日間、カレーを100店で連続100日間、ワイン100日間など、私のフィールドワークとは、つづけて比較することで何か見えてこないかと追っている。もちろん都市計画やまちづくりを専門としているから、おのずと、その分析によって街を浮き彫りにしていきたいと思っている。

特にケーキは、学生時代からのライフワークだから20年近い。都市計画を仕事にしても、ここまでケーキを毎日調査し続けてこられたのは、やはり都市計画とは無関係ではなかったからだろう。

調査方法とは、ノートに店の名とケーキを絵の具でスケッチしていくものであり、スタンプ帖のようなもの。自分が訪れた街の記録でもある。さいわい、ケーキ屋さんは、商業店舗を探すのが難しいと思われる住宅街やニュータウンでも簡単に見つかる。意外と新しい街にケーキ屋さんが増えている。しかも土地画整理やニュータウン開発による住宅街では、まず、最初に誕生する店であることも少なくない。



ケーキを記録しているノート。毎年テーマをきめて、1998年にはミルフィーユ、99年にはショートケーキなど

■ケーキ立国につぼん¹⁾

なぜ、街ができるとケーキ屋さんが生まれるのだろうか。誕生したばかりの街は、まだ歴史が始まったばかり。新たに移り住んできた居住者にとって、ケーキ屋さんができれば、おでかけに、わが街メイドの味を届けることができる。単に便利なだけでなく、ときには一つの街自慢にもなれば、うれしくなる。逆に、知人から、自分の街にある店を褒められると、自分自身が褒められているように思う。

今日、私たちは、暮らす街にもアイデンティティを求めるようになっていく。そこで、自分たちと一緒に街の歴史をつくっていくケーキ屋さんを、わが子のように育みたいのかもしれない。そこにわが街メイドのものが果たす役割は少なくない。

誇れるようなお店があると、ときには自分の街のことを好きになるきっかけとなり、自分の街ということ意識するきっかけにつながる。[わが街]ということを考える機会が少なくなったなかで、そうしたお店がもたらす街への愛着には、まちづくりを考えるなかで興味深いものがある。街は、そこに暮らす人々に愛され、それにともなって街となる。したがってお店がその契機となっているのであれば、まちづくりの手法として位置づけることは無意味ではない。さらに、まちづくりを考えるときにはケーキをテーマにすれば、誰もが身近に議論しやすい。まちづくりワークショップでの題材などでも、それぞれの街にあったテーマ探しが必要となるが、新しい街ではケーキは有効である。

■アイデンティティスペース

かつて家庭の和を飾るケーキとは、都心の繁華街からわが家へとやってくるものだった。それが、いまや日本では生活する街に欠かせないものとなり、さらに、よそへと発信していく拠点ともなっていく。そもそも日本の街では、和菓子屋さんそんな役割を担ってきた。江戸や大坂、地方都市の城下町などにはそれがあった。したがって近現代に広がった郊外に暮らす人々も、やはり同じようにわが街にそんな場所を求めたのだろう。新しい街の人ほど、その意識は強かったのではないだろうか。郊外住宅地でケーキというビジネスが成立したのは、このこととは無関係ではないだろう。ときには大きな新興都市でも同じかもしれない。ケーキや洋菓子のイメージが都市でいえば明治生まれの新興都市・神戸などにあるのは、そんなせいかもしれない。そこに暮らす人々が都市のアイデンティティを追い求めた結果だろう。

いずれにしても、私たちは自分自身だけでなく、わが街にまでアイデンティティを求め、味なものをつくる空間がその役割を担ってい

る。わが国は、味なものが贈りものとなる不思議な国だ。ヨーロッパでも同じようだとは思えない。味なものに対する宗教的な位置づけも異なるのであろう。私たちは、味なものに極めて寛容で親しみをもつ。アカデミックといわれる大学でも、私もケーキの講義をさせてもらっている。ときには建築構造の講義で、ケーキを美しくずさずに味わうことは頭で力学を考えていくこと、といいながら、ケーキを使って建築構造を教えている。

さらに、街に愛着をもたらしきかけを、ケーキや味なものがつくりだしている。ケーキだけでなく、海辺ではチクワ、山辺ではお豆腐がそんな役割を担い、そこに暮らす人たちにとってチクワ屋さんやお豆腐屋さんは、アイデンティティスペースとなっている。わが国では、味な空間は、街のアイデンティティスペースの形成と無関係ではない。ここまでは味な「もの」の話、いわばテイクアウトの味な話であった。

■街のコミュニティ・スペース

ケーキは、街のアイデンティティにつながる空間を育んだ。一方、街にはコミュニケーションを育む空間もある。私は、地域によってまちづくりのテーマ探しを必ず変えている。ケーキで盛り上がる街もあれば、お好み焼きに効果があるところもある。街には、そこに暮らす人がまちづくりについて考えやすいテーマを、必ずひとつはもつ。神戸の下町では、やはりお好み焼きがいい。町丁に店があり、そこがコミュニティ・スペースとなっている。お好み焼き屋さんを中心とした「お



お好み焼き屋さんは、神戸の下町ではコミュニティ・センターとなっている。そんな鉄板1枚で定員5名ほどの店を考えてみたいと、私の愛称みやちゃんという店の暖簾をつくってみた。「にくてん」とは、神戸・播磨・淡路で昭和中期までお好み焼きのことをそう呼んでいた

お好み焼き住区理論」を考えたこともある（『神戸とお好み焼き』）。鉄板1枚を数人で囲む小さな店、そこは公共空間である。イギリスのパブリックハウスつまりパブは、公共の家。神戸の下町では、そんな空間をお好み焼き屋さんが担っている。1枚500円もしない夕方には閉まる店。そんな店が瀬戸内には多い。そんな無数のコミュニティ・スペースは、同時に地ソースを育み。神戸市でもほぼ各区にソースメーカが存在し、地域の味を成している。もちろん地方によっては、四国では焼鳥屋さんが担っているなりして、各地でしっかりと育まれ、街の味をつくってきた。そうした空間がコミュニティに果たしてきた役割は少なくない。

問題なのは、最近は「食のまちづくり」といって、育まれてきたその商品だけを名物にして、しかもその商品を、育まれた空間から離れたところで提供することである。ときには一堂に集めて祭りにしている。それはそれで意義深いことであるが、忘れてならないことは、その「味なもの」は商店街や商業地で生まれてきたのではなく、暮らしのある居住地で育まれたものであること。暮らしから離れれば味も半減するように思えることもある。その味を暮らしの場で味わうことで私たちは、まちづくりを学べるのである。

■笑顔になってまちづくりを語れる テーマ探し

まちづくりを考えるとき、まずその街の人が笑顔になってまちづくりを語れるようなテーマ探しを行う。そのとき味なものが多くなるのは日本だからかもしれない。

最後に一例を紹介したい。私はまちづくり資源を発掘すると、新聞連載などで読者と会話していきながら、まちづくりへと結びつける。転勤中の徳島で5年間探して見つけたのが遊山箱（ゆさんばこ）だった。昭和30年代頃まで桃の節句（ひと月遅れの4月3日）に子供たちが山へ川へ磯へと持っていった本当に小さなお弁当箱のことだ。5年間で、どうやらこの話題になると、皆が懐かしく笑顔になることを発見した。しかも話題になるのは出かけた山の環境、一緒に遊んだ友達、詰めていったお弁当、それが空になったら詰めて



遊山箱

くれる近所の人、何よりもどんなに忙しくても三段それぞれに詰めてくれたお母さんやおばあちゃんへの感謝と、箱には感謝と思い出が詰まっている。にもかかわらず昭和30年代以降、省みられることもなくなっていた。よそのものの私にとっては、家族、自然とつながるまちづくりのテーマとして新鮮だった。そこで連載を始めたとなんにも反響は尋常ではなく、連載で提案していったまちづくりへと繋がっていった。この遊山箱をもって山へ川へと遊ぶ会、お弁当づくりの料理教室、箱作りの工作教室と、様々な会が開催され、遊山という行事も復活してきた。朝の連ドラ（『ウェルカム』）にも出てくるまでになった。なぜ火が点いたかという、私がよそのものとして、他では見られない風習であることを書いたからだ。つまり、地元では何でもない、どこにでもあるものと認識されていた。ところが地域のアイデンティティと感じると変わっていった。

遊山箱が成立する環境とは、家族、近隣、自然とそれぞれが必要であり、復活には総合的なまちづくりが不可欠であった。まちづくりに繋がるテーマとは、単なる味なものではない。味とは思ひ出や環境が不可欠であるがゆえに、味なテーマでまちづくりが成立するのである。決して味なものだけで考えてはならないと思う。

●補注

1) 「ケーキ立国につぼん」とは、文化人類学の米山俊直先生が、わたしの研究について名づけてくださったものである。

●本論に関する文献

- (1) 三宅正弘『神戸とお好み焼き まちづくりと比較都市論の視点から』、神戸新聞総合出版センター、2001年
- (2) 三宅正弘『遊山箱 節句の弁当箱』、徳島新聞社、2006年
- (3) 三宅正弘『甲子園ホテル物語—西の帝国ホテルとフランク・ロイド・ライト—』、東方出版、2009年
- (4) 三宅正弘『石の街並みと地域デザイン 地域資源の再発見』、学芸出版社、2001年

(みやけ まさひろ)

食べられる景観づくり

日本大学生物資源科学部
生物環境工学科 教授
工学博士

糸長浩司

参考文献

- 1) HILDER JACKSONほか、『ECOVILLAGE LIVING』、GREEN BOOKS、2002
- 2) 糸長浩司監修、『パーマカルチャーしよう』、自然食通信社、2006
- 3) 糸長浩司ほか、日本建築学会編、『地球環境時代のまちづくり』、丸善、2007

筆者は、近年、日本建築学会の低炭素型社会特別研究委員会（代表中村勉）に参加し、2050年の低炭素型社会・都市像、ライフスタイル像を研究している。消費を中心とした都市像、そのための空間構築を目指した近代的都市の限界は顕著である。都市の中に、生活者の視点からみた、環境負荷の少ない、低炭素で自然と共生した豊かで楽しい空間の創造が必要となっている。そして、その空間の創造と維持・活用に、生活者自らが主体的にかかわり、生活者の喜びにつながる仕組みが必要である。

21世紀の低炭素型都市像は、消費型都市像からの脱皮にある。都市の中に健全で有益なエコシステムを組み込む。「生産—消費—分解」の循環系である自然のエコシステムを、人間生活に再デザインする。このエコシステムには、農の組み込みが不可欠である。

■農を組み込んだ持続可能な ライフスタイルデザイン

筆者は、農を生活空間に組み込むデザインとしてパーマカルチャーに注目して、NPO的活動をしている。

建物の緑化、都市の緑化が強調されるが、緑の質、内容に注目する必要がある。暮らしの原点に帰り、人間の生きる原点としての食をつくる農を暮らしの中に組み込む必要がある。人々の暮らしに対する知恵と技術・技能の蓄積が必要である。「百姓」という言葉には、多様な技をもっている人の意味がある。それは、暮らしに必要なエネルギー、水、食料、家を確保するために、自然に働きかけ創造する人を意味する。この自立的な暮らしを獲得した「百姓的な人」になるための、デザイン概念としてパーマカルチャーがある。

パーマカルチャーは、暮らしの自給性と持続性のための統合的なデザイン論である。豪州の生物学者ビル・モリソンたちが1970年代に提唱した概念で、パーマネント（永続性）とアグリカルチャー（農業）、あるいはカルチャー（文化）の合成語である。

身近な場での永続的な食料生産をベースとする。自然環境、社会環境、経済環境のサステナビリティを大切に。このデザインを応用した実践的な活動に、自給自足的で環

境共生型の集住空間「エコビレッジ」づくりがあり、豪州、米国、英国、ネパール、アフリカ、日本などの各地で行われている。

「AGAINST NATURE」（自然を征服する）ではなく、「WITH NATURE」（自然とともに）での共生関係を築き、持続的な環境を形成していく上で、生態系のもつシステムから多くのものを学び、多様性、連関性、循環性のシステムをつくりあげる。食料生産と環境形成の共生、「フードフォレスト（食べられる森）」にある。「混在と統合のデザイン」といえる。環境と調和し、持続的な食料生産と居住環境づくりの、両面のデザインである。農、建物、自然を統合したデザインである。自然生態系の富めるシステムづくりを人間が意識的にして、人間と自然生態系の共生関係をより持続させようとする試みでもある。

■食べられる景観づくり

パーマカルチャーは、エディブルランドスケープ（食べられる景観）づくりをめざす。野菜、ハーブ、果樹などの食べられる植物を構成要素とする景観・環境づくりである。生活の中に農的な要素を入れ、身近な生態系との共生関係を自給的で循環的な関係として生活者自らが創造する景観である。歴史的には、江戸時代の米沢藩や仙台藩では、非常時に備えて武家屋敷に食べられる緑を植えることを藩の政策として推奨したという。日本にも、食べられる景観づくりの伝統がある。

生活空間を「食べられるエコシステム化」する。住宅のガーデン、ベランダ、屋上、壁面、歩道、空き地、公園、街角広場での農産物の生産、市民農園（英国のアロットメント、独のクラインガルテン等）、コミュニティガーデン（都市の中の空き地を活用してコミュニティでオーガニックな農産物を生産する共同の庭であり、コミュニティの再生の場としての機能も果たす）、シティファーム（都市の中の空き地を活用して、ボランティア組織が家畜や野菜畑を共同で経営し、憩いと循環系の場として維持管理する。米国、英国、豪州などで盛んである）、自給的で共同の暮らしの場づくりを都市内部で進めることになる。

生態系のシステムにおける分解者としての

土、あるいは農地の機能、農の機能を、現代のシステムの中で再評価する必要がある。都市生活から出る生ゴミは都市外に捨てられてきた。こうした生活を改め、循環型の都市生活を創造していく上で、農土のもつ意義は大きい。生態系における生産者、消費者、分解者の三位一体の関係が確立されて、はじめて持続的な生活空間が可能となる。

■シティファーム、コミュニティガーデン

都市の中の遊休地を地域住民が主体となって、野菜を育てたり、豚や馬などの家畜の飼育の場として再生し、地域の子供たちの教育の場、レクリエーションの場としても活用する。英国では都市住民は、この種の活動に熱心である。アロットメントという市民農園の歴史は英国では長い、それとは異なり、チャリティ団体の活動が中心で、コミュニティの再生・形成も大きなテーマとなっている。

シティファーム、コミュニティガーデン、学校ファームの形成である。チャリティ団体として活動しているものも多くある。これらの組織を束ねる英国の協議会のパンフレットのサブタイトルには、「コミュニティ管理された農場や菜園・庭を介して地域の再生を促進する」とある。コミュニティガーデンの運動は、英国では1960年代に始まり、シティファームは1972年に始まった。この時に、草の根の市民は、放置された場所や未利用地を、地域のコミュニティにとっての生活の質と環境を改善する場所として再整備した。地域の人々の食べ物を生産する場、環境を改善する場、学び楽しむ場であり、また同時にコミュニティの発展のための場という多面的な機能をもっている。

英国でもっとも古いシティファームは、ロンドンの「ケンティッシュ・タウン・シティ



写真1 ロンドンのシティファーム(マドシュット・パーク・ファーム)

ファーム」である。ロンドン市内の下町的な箇所、鉄道の高架の残地を活用した農場であり、乗馬や豚の飼育と農園が共存し、地域の子供たちへの環境教育の場ともなっている。また、有名なドックランドの再開発地の中にあるのが、「マドシュット・パーク・ファーム」である。再開発された高層建築と牧草地と羊のコントラストは奇妙な都市の風景をつくる。ここは政府の住宅地開発に反対して、シティファームのトラスト団体を結成し運営している。現在は地域住民の憩いの場であり、子供たちのために動物教育等の教育センターもっており、多くの幼児を連れたグループが牧場内を散策したり、センター内で学習している。

これらの農的なコミュニティ活動と連動したもののとして、コミュニティ・コンポスト運動がある。台所から出る生ゴミや植木の剪定ゴミをコンポスト化して、花卉の肥料として利用したり、野菜、果樹づくりのための土づくりとして活用する試みである。これをコミュニティ単位で自主的に回収、コンポスト化をする試みが英国で近年盛んになっている。

日本でも市民農園のレベルを超えた、コミュニティによって維持され支えられたシティファームやコミュニティガーデンづくりが希求される。



写真2 英国のシティファーム内でのコミュニティコンポストの生産コーナー

■食べられるエコキャンパスづくり

筆者は、大学キャンパスの一角を利用して学生たちとエコロジカルでエディブルなキャンパスづくりを、「キャンパス・エコビレッジ」と称して実施している。環境、建築、農の融合した生活環境デザインと、そのモデル環境づくりである。

建物も環境共生建築としてデザインし、パッシブソーラーデザイン、アースチューブ、屋上・壁面緑化等を採用し、また、ストローベイル(藁を束ねて箱状にした家畜の餌用ブ



写真3 日大エコキャンパスの食べられる景觀の成長過程

ロックを断熱材として利用) 建築を学生たちとつくってきた。キャンパスの生活者である学生が、自立循環型のライフスタイルを体験・研究できるようになっている。多様なエディブルランドスケープ、コミュニティガーデンの実験の場となっている。建物にとっての断熱性能として採用される屋上緑化や壁面緑化にもブドウ・キュウイ・サルナシ・アケビなどの食べられる植物を栽培し、南の庭は豆科の植物、コンパニオンプラント(共栄作物)を導入し、各種の果樹・野菜・ハーブの混栽型果樹・菜園がつくられ、ビオトープ池や水路の水環境も形成されている。

循環型土づくりとしては、野菜屑によるミミズ養殖と堆肥づくり、移動式鶏小屋、豆科・緑肥作物による土づくりを行い、無化学肥料と無農薬肥料によるエコロジカルガーデンが形成されつつある。

センターの別のグループは敷地内にある建設残土の丘を活用した棚田での合鴨同時水稲作の自然有機農法での米作りを小学校の総合学習プログラムとして実践している。

さらにユニークなものとしては、植物による污水浄化プラントの開発研究、養殖排水を活用した水耕栽培のアクアポニックスシステム開発研究があり、植物と微生物資源を活用した污水浄化・活用システムの実験研究を温室棟で進めている。それは北欧やエコビレッジで試みられている生物資源活用型での生活排水処理、食料生産、水系ビオトープ形成の複合的なシステム開発研究である。

大学キャンパス内での学生と教員によるキャンパス内のエコビレッジづくりのモデルと自負しており、エコロジカルなまちづくりの一つのモデル的な場として、環境共生まちづくりや教育の場として活用していきたい。

(いとなが こうじ)

まちおこしに活かす B級ご当地グルメの マーケティング戦略

(社)B級ご当地グルメでまちおこし団体
連絡協議会代表理事
富士宮やきそば学会会長

渡邊英彦

最近のTV番組や雑誌の特集は「食」をテーマにしたものがあまりにも多すぎて、自分で「食によるまちおこし」を謳って活動しているにもかかわらず辟易してしまうことがある。反面、自分たちの取り組みが時代のニーズに合っているという実感もある。

反感を買うかもしれないが、多くの自治体が財政難であるという背景において、まず指摘されることはハード（ものづくり）よりもソフト（ものがたり）に政策をシフトしなければいけないということである。一昔前の中心市街地活性化策は、第三セクターで集客施設を次々に立ち上げることであったが、私の知る限りほぼ100%に近い施設が結果的にお荷物になり、継続の運営方法に頭を抱えているのが実情である。ハード整備がいけないなどというつもりは毛頭ないが、あたかも箱物をつくることだけが目的であるかのような施策が多く見受けられるのには、何か、需要と供給という概念を超えた力が働いていたのではないか思えない節がある。

■「B級ご当地グルメ」でまちおこし

そんな活性化策がほぼ終焉を迎えるのと時を同じくして浮上してきたのが、「食」特に「ご当地グルメ」によるまちおこしの世界なのであった。これは、もうお金をかけたハード整備が出来ない環境で、何か活性化の素材となるものはないかという視点で探し出したものである。さてそこで、なぜ「ご当地グルメ」特に「B級ご当地グルメ」が地域活性化の素材と成り得るのかを考察してみよう。

その前に、「B級ご当地グルメ」とは何なのか？ 前提となる要素をある程度確認しておかなければならない。これは学術的に条件が規定されているわけではない。われわれ(B級ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会＝通称：愛Bリーグ)の中では、「その地域で広く一般市民に食べられている、すなわちその地域では『食文化』として根付いて」おり、「B級」と呼ばれるからには庶民の味として「安く」提供されているものが「B級ご当地グルメ」と呼ばれ得るものであると考えている。

従って、基本的にはまちおこしが目的であっても、俄仕立ての開発型商品はその時点で



「第4回B-1グランプリin横手」には、2日間で26万7000人が訪れた

は「ご当地グルメ」とは呼べないものであると私は考えている。(ただし、ここで「基本的に」という表現を使ったのは、多くの地域で地元素材を活かした「開発型料理」が生み出されており、その行為自体を否定しているのではなく、あくまでも「地域の食文化」と呼べるレベルまで普及しているか否かを問題としているのである)

■4P理論を当てはめてみれば

こういった前提を押さえて、「B級ご当地グルメ」の有用性について分析するに当たり、マーケティングミックスの4P理論を用いて説明してみたい。念のために4P理論を簡単に説明しておこう。もの(商品やサービス)が売れるためには、4つの要素を組み合わせなくてはならず、その4つとはProduct(製品)、Place(場所、経路)、Price(値段)、Promotion(売り込み)である。簡単に言えば、いくらおいしいもの(Product)があっても、それが売られる店や流通経路(Place)がなければ売れないし、また、値段(Price)が手頃でなければ消費者は買わない、そして、それを売り込む宣伝広告等(Promotion)がなければ消費者の認知度が高まらないので購買に繋がらない、つまり4Pのどれが欠けてもものは売れないのである。

この理論を「富士宮やきそば」に当てはめて考えてみると、富士宮には50年以上前から地元で食べ続けられている特徴のあるやきそば(Product)があり、そのやきそばを提供



する店 (Place) もたくさんある。庶民の味 (B級グルメ) であるが故に値段 (Price) は安い。さてPromotionはどうかと言うと、2000年以前はほとんどなされていなかったが、「富士宮やきそば学会」が結成され次々にメディア戦略を繰り広げるにより、地域外の消費者の認知度を高め、急激な地域ブランド化が進んだのである。つまり、富士宮においては4Pがうまくミックスされたと言ってよいだろう。

これを他地域のB級で当地グルメに置き換えてみると、地元で長年食べ続けられている庶民の味であれば、Promotion以外の3Pは揃っているものが多いのではないかと考えられる。そして対外的売り込みをしていない、あるいは出来ないが故に地域では当たり前のようには食べ続けられているが、一歩地域外に出たら誰も知らない存在のまま埋もれているのである。ということは、効果的なPromotionをミックスさせることで「富士宮やきそば」のようにブレイクする可能性のある当地グルメが多く存在しているということである。

■「富士宮やきそば」のPromotion戦略

さてそこで、富士宮がなぜうまく4Pミックスに成功したのかについて考えてみよう。これはあくまで後付けの理論なのだが、「富士宮やきそば」のPromotion戦略は、「富士宮やきそば学会」という市民団体の仕掛けであり、行政や飲食関係業界の予算的後ろ盾はなく、お金を使った広告等のPromotion活動は出来ないが、地域外の一般消費者に「富士宮やきそば」の存在を認知させなければならないのである。

なぜ消費者に認知させることが重要かと言えば、これはサミュエル・ローランド・ホールが提唱したものだが、消費者が「ものを買う」という具体的行動に至る心理プロセスを分析した「アイドマ (AIDMA) の法則」というものがある。これを「富士宮やきそば」に当てはめて説明してみよう。一般消費者は「富士宮やきそば」の存在というものを、TVや新聞等の報道を通してAttention (気付き、認知) する。認知した消費者は次に、「富士宮やきそばとは、どういうやきそばなのか？」というInterest (興味、関心) を抱く。興味

を抱くと次には「一度食べてみたい」というDesire (欲求) が生まれ、その消費者の記憶に「富士宮やきそば」というものが定着する=Memory。そして、その消費者が仮に旅行や仕事で富士宮方面に出かけた際などに、記憶に残っていれば実際に「食べてみよう、買ってみよう」というActionにつながる。この一連の心理プロセスを「アイドマ (AIDMA) の法則」という。

もちろん目的は、多くの消費者を「食べる、買う」というActionに結びつけることだが、そのためには、入り口であるAttentionする消費者を増やさなければならない。そして、お金を使わずに多くの消費者に認知させるために最も効率的な手段は「報道」であると私は考えている。「報道」に結びつけるためには記者に「取材」させなければならず、記者はどのようなところへ取材に出掛けるかという「面白い、楽しい、あるいは怪しい話題」のあるところへ、である。

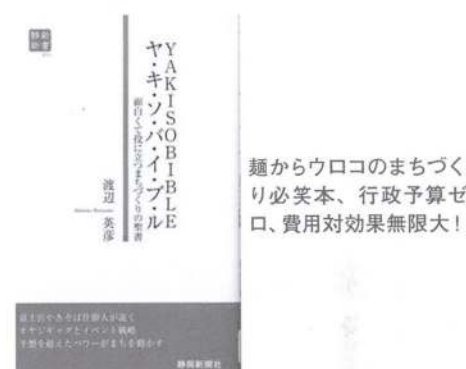
■イメージは言葉で伝わる

この「面白い、楽しい、怪しい」というイメージが非常に大切で、そのイメージは「言葉」によって伝えられるのであって、「味」が伝わるのではない。「おいしい、まずい」という問題とは違う次元での話である。私は全国各地を訪問し、「地域ブランドづくり」に取り組んでいる方々の話を聴く機会が多いが、「地産地消でおいしいものをつくれれば地域ブランド化する、来てみて食べてみればわかる」といった発言をよく耳にする。しかし、「来てみて食べてみればわかる」というのは、裏返して言えば「行ってみて食べてみなければわからない」ということであって、消費者に「行ってみたい」あるいは「買ってみたい、食べてみたい」と思わせることが大事なのであり、消費者はマスコミの報道によってその商品の存在を認知 (Attention) するのである。

マスコミの取材につなげる過程において効果的なのは、「言葉遊び」の類だ。世間では「オヤジギャグ」「ダジャレ」などといって片付けられてしまうことが多いが、宣伝広告の世界はこういった表現で溢れているのが実情だ。富士宮やきそば学会では徹底的にこの効果を利用している、「やきそば振興協議会」

ではなく「やきそば学会」であり、「焼きそば調査員」ではなく「やきそばG麺」、「出張サービス」は「ミッション麺ポッシブル」、「日帰りバス旅行」は「ヤキソバスツアー」、「やきそば用食事券」は「麺財布」、拙著は「ヤキソバイブル」といった具合である。

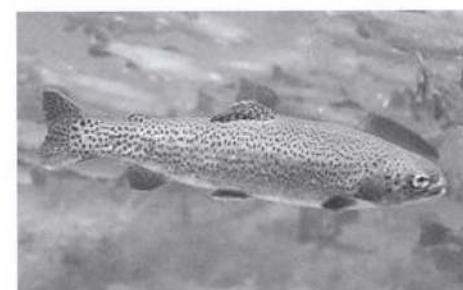
一見ふざけたように見えるが、コンセプトは至って真面目で、表現の仕方、伝え方、つまりコミュニケーションの手段を効率化するための方法なのである。別な言い方をすれば、コンセプトとパフォーマンスは別であると考え、「楽しい、面白い」パフォーマンスを展開することによって話題性を高め、マスコミの報道につなげるのである。



■やきそばでの経験を次のまちおこしへ

こうしたパフォーマンス (Promotion) を展開したことで、富士宮では10年間で400~500億円 (正確な数字は現在調査中) の経済波及効果を出したと言われている。この効果を、やきそばだけの世界にとどめるのではなく、現在は、「富士宮市地域力再生総合研究機構」という組織を立ち上げ、やきそばにおけるコミュニケーション戦略を活用して、「にじます」や「乳製品」など富士宮の地域素材を広く世界に発信すべく活動を展開中である。

(この活動の結果、にじまは2009年、富士宮市の魚に制定された)



(わたなべ ひでひこ)

クライנגアルテン方式 での田舎暮らし支援の 取り組み

神河町地域振興課地域振興係長

真弓憲吾

神崎郡神河町は、兵庫県のちょうど中央、分水嶺の南側に位置し、町の中心部を南北に播但自動車道、国道312号線、JR播但線が縦断しており、姫路市まで約40分、神戸・阪神間まで約1時間30分圏、大阪まで2時間圏内と、都市部からも日帰りで往復できる比較的便利なアクセス環境にある。

■豊かな自然の中での暮らし

自然の豊かさを持ち合わせた神河町は、今秋に公開予定の映画「ノルウェイの森」ロケ地ともなった西日本有数の高原地帯「大河内高原」、また冬には日本国内でも非常に珍しい滝の氷結が見られる扁妙の滝を有する県立自然公園「笠形山千ヶ峰」といった1000m級の山々に囲まれ、これらの山々が育む清流があり、「高原と名水の町」として外向けにPRしている。

町の中央には、北播磨から南但馬にかけての地域一帯の医療の中核となっている「公立神崎総合病院」があり、救急体制も整え町民の安心を確保している。また町内一律200円（1乗車当たり）で利用できるコミュニティバスもあり、交通弱者の移動手段も確保している。



■クライנגアルテンカクレ畑の整備

神河町の西側に位置する大河内高原カクレ畑に、「クライングアルテンカクレ畑（ばた）」が、平成22年4月からオープンし、入居開始となる。



神河町では町内の定住促進を図るため、住宅地の開発とあわせ、都市住民の田舎暮らし支援活動を進めている。この活動の中で、大阪・神戸・阪神地域で「臨時田舎暮らし相談所」を開設し、田舎暮らしに関する相談を受けている。この中では「田舎暮らしをしてみたいけど、どんな所かわからない中で、いきなり物件を買うのは勇気がいる。少し体験できるようなものはないのか?」といった声をよく聞く。そこで2～3年試しに住んでみて、地域をよく知ってもらおう、ということで建設した施設である。利用は1年単位で、最大5ヵ年まで延長更新することができる。この5ヵ年の間に、神河町を知ってもらい気に入ってもらえたら、町内の空き家を買ってもらい、あるいは町内の分譲地等を購入してもらい、家を建てて住んでもらう、など田舎暮らしを体験しながら、それを移住につなげていくとする取り組みである。

クライングアルテンとはドイツ語で「小さな庭」というような意味がある。兵庫県内でも、多可町や、篠山市などでは、以前から組み込まれてきた仕組みである。全国でも先進的な取り組みとしていろいろな所で、事例紹介もされている。県内ではいくつか類似の施設があるが、どこの施設も人気があり、すぐに満杯になり、今でもキャンセル待ちをしている人が多いようである。

神河町の今回整備されたクライングアルテンカクレ畑は、庭先に10坪ほどの畑がついており、宿泊施設は1LDKロフト付、バス、トイレ独立式で、IHのキッチンを完備してい

る。庭先の畑だけでは足りないという方は、隣接の「ふれあい農園」を20坪単位で追加で借りることができる。

施設の利用には、利用料35万円／年、管理費6万円／年、保証金25万円で、これに上下水道利用料4万8千円／年、自治会費8千円／年が必要。このほかにも、電気代、ガス代、CATV利用料などが必要となる。全部で18区画あり、すべて埋まっている。

■カクレ畑ログハウス村の取り組み

このクラインガルテンカクレ畑が建設された長谷大川原地区は、過疎化・高齢化が進み、集落では28世帯68名、うち高齢者人口割合が50%という限界集落となっている。

そこで地元では平成4年以降、関西電力水力発電所ダム建設時に残された作業員宿舎跡地の利活用により集落の活性化を図ろうと検討してきた。しかし、関西電力跡地の土地確定測量・登記が未確定な状態で放置されたままであり、この土地の整理が大変困難な状況のため当開発計画については長期間放置され、旧大河内町では積み残し課題となってきた。

ところが平成17年の合併以降、旧町課題のすり合わせの中で、この土地の利用がクローズアップされてきた。そして県のパイロット事業にうまく乗ることができ、さらに、自社事業として取り組んでもいいとする民間事業者の協力を得ることができ、地元、民間事業者、県、町の四者の協力体制が確立し、開発に向けて共同体制で進めることとなったのである。

当初は、すべて土地の分譲方式で、建築メーカーを限定するという建築条件で販売を開始した。建築メーカーを統一することによりデザインが統一され、高原の町としてのイメージ形成・景観形成を図り、大河内高原全体のイメージアップを図ろうとしたのである。

ところが、折からのリーマンショックや世界同時不況などのあおりで、景気もどん底となり、なかなかこの土地を購入して建物を建てようという方は現れず、非常に苦慮してきたところである。モデルハウスも販売対象としたが、「周りに何も無い山の山腹で、一番最初に住むには勇気がない」といった声も



4月に入居が始まる
カクレ畑（ばた）
ログハウス村の一日



聞かれた。施設PRのため何回もイベントを開催したが、土地を買って建物を建てる方はなく、未だに販売できていない。

この区域内に何か建物があれば、ということで方策を検討していたところ、うまく財源を確保することができ、クラインガルテンの建設が実現した。

今回の整備により、18棟の建物が出現し、一帯の景観は大きく変わった。明らかにイメージアップが図られ、分譲地についても、次第に問い合わせが増えている。

■今後の取り組み

クラインガルテンカクレ畑の事業主体及び所有者は、民間事業者となっている。民間事業者から、地元自治会の役員で組織する「大川原セルフビルド村推進委員会」に、運営を委託することとなっている。この委員会の事務局は、町地域振興課におくこととしている。

クラインガルテンカクレ畑には、18家族42名の方が週末滞在や短期滞在、あるいは定住することとなり、18家族で「入居者友の会」を結成してもらうこととしている。そして地元住民の皆さんと入居者の皆さんとの間で、

新たな地域づくりを行ってもらうこととなる。この地元大川原集落の皆さんには、カクレ畑の取り組みに大変な努力をいただいている。ここで活動する皆さんは、年配の方が多いものの、そこらの若い人たちよりはよっぽど元気である。カクレ畑でのこれまでの数々のイベントにも、炊き出しやイベントでの餅つきや、バーベキューなどでの振る舞いなど、元気に取り組んでもらっている。

カクレ畑の取り組みのほかに、「ふるさと青年協力隊」や「大学生のワークキャンプ」など若者のボランティア受け入れなどにも取り組まれて、若者たちと共に村の共同作業にも抜群の明るさとチームワークを発揮されている。

クラインガルテンカクレ畑の入居者の皆さんの中には、積極的に村づくりにかかわっていきいたいという方も多く、良好な関係でこれからの大川原の村づくりが進んでいくものと思われる。今後は、地元集落の皆さんとここの入居者たちとの交流の中で、高齢化により後継者不足となっている集落の営農作業などを担ってもらえる人が出てくることを期待するばかりである。

(まゆみ けんご)

第五圖七八住人の家の平面圖

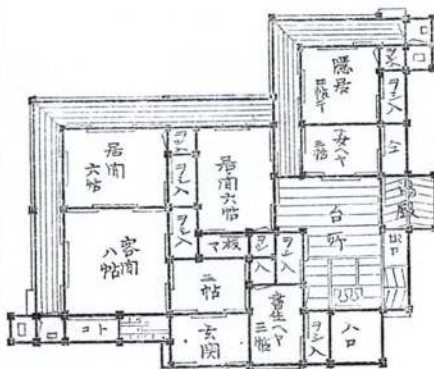


図3 座敷と離して設けられた台所の間取り
(井上繁次郎『通俗 家屋改良建築法』博文館 1902年)

“食空間”を 中心とした住まい への転換

神奈川大学工学部建築学科 教授

内田青蔵



図5
文化村のハッチ
付の住宅
(『文化村の簡易住
宅』洪洋社 1922年)

■台所という空間

少し乱暴な話から。日本の住宅の間取りのなかで、間取りがはっきりとわかる最も古い住宅形式は竪穴式住居。円形のワンルームの間取りの建物で、古くは炉もなく、ただ無防備になる睡眠の間の身を守る機能だけのいわば巢のようなものだった。やがて火を扱うようになると、多くは室内に炉を設け、ワンルームながらも炉の周囲で寝たり調理したりと、まさに多様な生活を取り込んだ場へと変容していった。中央に置かれた炉は、調理用としてばかりではなく、暖房設備でもあり、夜になると周囲を照らす明かりともなったのである。炉の位置はその後、中央から間取りの隅に移動され、その形態も竈に変化した。それとともに竈の周辺は、食器類・調理器具はもちろん食料の保管場所ともなり、また、竈の普及は調理器具や調理方法の発展を促した。火が持ち込まれることにより、単なる寝床の巢は、多様な生活を取り込んだ住まいへと変容したのである。

ところで、間取りに話をもどせば、この竪穴住居のワンルームの空間は、その後の生活の変化のなかで重視された多様な機能に合わせて分割が行われた。間取りの中央に設けられていた炉の、端への移動は間取りの分化の初源的な変化を意味していた。そうした分化の過程で、作業を伴う台所は土間に残り、休息を中心とする生活の場は湿気を避けるために床上に設けられることになる。

■近代の台所

間取りの発展は、基本的には機能分化として捉えることができる。それゆえ現在では、間取りは必要な部屋の集積体として考えられているが、機能分化のなかでいろいろな部屋が生まれ、そして、消えてきた。こうした長い間取りの変化のなかで、家族生活を最も重視した間取りが考案されたのが近代といえる。現在のわれわれが当たり前と考えている間取りは、実は、わずか100年ほど前からの追求のなかで生まれた。それは、言い換えれば、現在の間取りも将来大きく変わる可能性を秘めていることを意味しているのである。

さて、この100年の家族生活を重視する考



図1 土間の大きな台所

(Edward S. Morse『JAPANESE HOMES AND THEIR SURROUNDINGS』Dover Publications 1961年)

図2
膝をついて作業
している様子

(増山新平『新しい構造図解 台所
浴室及便所設備』
1938年)



え方を基にした間取りの追求のなかで、台所も大きく変わった。例えば、住まいのなかでも水を使う作業の関係から、台所は土間と強い結びつきを持っていた。モースの残した農家の土間は、そうした近代以前の伝統的な台所の様子をよく教えてくれるし(図1)、また、そもそも伝統的な床座の起居様式がこうした台所作業にも見られ、調理もしゃがんだり立ち膝で行っている様子が見て取れる(図2)。

しかしながら近代の台所の変革では、燃料エネルギーとしてのガス・電気の普及や上下水道の普及を背景として、広い土間を非衛生で使い勝手の悪い場として排除し、伝統的な作業姿勢は、自然な姿勢として立ち作業に変わることを求めた。そして大正期になると、主婦一人で調理をこなせる諸設備を配した機能的でコンパクトな台所が目指された。こうした変革は、住まいの洋風化の動きとともに、住まいのあり方を、伝統的な接客本位の考え方から家族本位に改めていこうとする機運のなかで、確実に浸透していったのである。

そして、こうした台所の変革は、次の段階として間取りそのものの変化をも促した。すなわち、住まいの機能性を高めるためには台所の変革だけでは限界があり、他の部屋との関係性を再考する必要も生じたのである。かつての台所は、主婦の指示のもとで使用人の働く場であり、また、作業に伴う火や音やに

おいの問題から母屋のはずれに置かれ、特に大邸宅では接客の場である座敷からは最も離れた場所に置かれるのが常道の配置であった(図3)。こうした台所は、機能性や能率性の向上という観点から、接客の場、あるいは、家族生活の場との位置関係が問題視され、動線的にも台所と食堂や座敷の位置をもっと近距離の密接なものとするのが目指されることになるのである。

その結果、台所と食堂(あるいは茶の間)の隣接化が進み、次いで台所と食堂の境の壁部分にハッチやハッチ付きの食器戸棚が置かれることになる。こうしたハッチの導入はアメリカ住宅の影響が強かったが、ハッチにより料理や食器の搬入が単純化され、まさに使用人のいない家族だけの住まいが実現していくことになる(図4)。このハッチは、戦前期の住宅では一種のブームのように流行した。当時の住宅専門誌『住宅』をみると、1920年代以降の住宅にハッチを採用した事例が出現している。その後もコンスタントにおよそ2割の住宅にハッチが設けられている。1922年に開かれ、わが国最初の実物住宅展であった文化村の出品作品にもハッチを取り入れた住宅が出品されていた(図5)。このハッチの流行もあって、食事の準備は家族の担うものとなり、台所も家族の出入りする場へと変化した。台所は主婦の仕事場から家族の生活の場へと移行しつつあったのである。

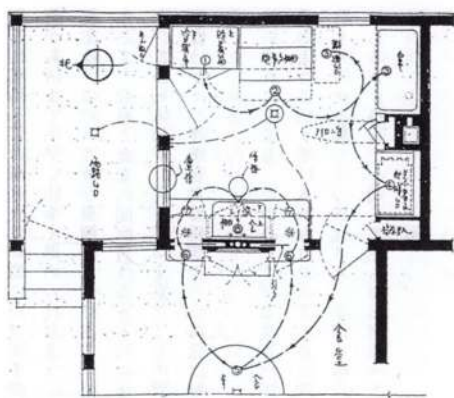


図4 ハッチのある間取り(模範的なアメリカの台所)
(芹沢英二『新日本の住家』アルス 1924年)

■DKの誕生

台所と食事の場の緊密な関係性の追求が展開される最中、わが国は戦争に突入し、やがて、戦後を迎えた。ここで一気に台所は変わることになる。すなわち、それまでの間取り

の機能分化の原則と逆行するかのように、再び食事の場を兼ねた多機能型の台所……DK……が提案された。このDKは、終戦直後の面積制限のなかで最小限の基本的な人間生活が営める住まいの確保の措置だったのである。ただ、私見では、このDKは、遅からずわが国の住まいの間取りとして出現していたと思う。なぜならば、台所と食堂の間には既にハッチという穴が開けられ、お互いが強く結ばれていたからである。このハッチを大きくしたものがDKといえるし、ハッチの定着がDKの急速な普及を可能にしたと考えられるからである。

ところで、台所のDKへの変化は、台所の機能の“作業の場”から“居室”への質的な変化を意味していた。そのため、DKを積極的に取り入れた旧住宅公団では、作業の場を居心地の良い居住空間とするために様々な工夫を展開した。そのひとつがよく知られるステンレス・シンクの導入であり、調理のにおいを外に逃がす換気扇の導入であった。そして、電機メーカーも歩調を合わせるようにデザインを重視した多様な家電製品を開発し始めたし、家具メーカーも併走した。

■“リビング”から“食空間”へ

こうした工夫はDKの浸透に大いに役立ったが、それでも絶対的な面積の狭さは解消できず、また、作業の場を居室として使うことへの精神的な抵抗感もあって、わが国の経済力の回復のなかでDKのバリエーションとしてリビングを確保したLDKが出現し、台所を作業の場として壁で仕切って独立させる回帰的傾向も見られた。

リビングは、大正期以降に目指されていた新しい住まいの中心的存在でもあり、テレビの普及などと相まって一時期大いにその存在感を示した。しかしながら、子供室の普及といった個の空間の確保やTVの小型化や低廉化によるパーソナル化の展開、さらには、パートなどによる主婦の社会進出のなかで、家族が一緒に過ごす時間が減少し、急速にリビングという家族団らんの場合は家族を惹き付ける力を失うこととなる。

こうしたなかで、現在、注目され始めているのが“食”を中心とする空間。閉ざされた

台所は再び開け放され、調理や食事は家族と一緒に楽しむ行為として見直されつつある。間取りも、台所を中心にその周囲に食事や会話を楽しめる空間を用意したものが提案され、男性が趣味として調理を楽しみ、また、友人たちと一緒にパーティを行っている事例が増えているようだ。

一緒に住みながらも生活時間が異なり、家族がなかなか一緒に時間を過ごせなくなりつつある生活が当たり前になり始めている昨今、食事という行為は唯一残った家族一緒に強要することのできる貴重な行為といえる。音楽や映画やTVは一人の方が楽しめることがあるが、食事は大勢の方が楽しい。調理も片付けも一人の場合は作業となるが、大勢と一緒にならば娯楽に変わることもあるのである。

なお、空き室だったリビングが近年、子供の勉強の場など多目的な部屋として再利用され始めつつあるという。確かに今年度の学生の卒論で行った小学生を対象とした子供室の利用調査によれば、ゲームなど一人だけの方が良い場合は子供室に居るが、勉強や他の遊びはリビングで行うという傾向が強くみられた。それは、子供たちも一人でいるよりは、家族の誰かと一緒に感じられる空間の方が、居心地がいいと感じていることにほかならない。電話による会話の沈黙はさみしいが、直接行う会話は話が途絶えても傍にいてだけで十分楽しいのだ。

いずれにせよ、リビングの復活も家族と一緒に過ごすことの重要性に本能的に気付いたからかもしれない。ともあれ、家族が一緒にいる行為をより活発化し魅力的なものにするためには、やはり家族を結び付ける具体的な行為が必要だ。その意味では、今後の住まいでは、作ることや食べることを楽しめるアクティブな場である“食空間”が重要な役割を果たすのではないかと。また、近代化の過程で家族中心の住まいを求めたあまり、接客という機能も排除してきた。そのため、今日の住まいは家族だけの空間となってしまった。しかしながら、豊かな住文化は社会との交わりで初めて形成されるのだ。その意味で、食空間を通して、もう一度住まいの社会化を取り戻すこともこれからの住まいの重要な課題のひとつといえるのだ。(うちだ せいぞう)

日本のライフスタイルと キッチンの変遷

黒田デザインネットワーク

黒田 潔

■憧れのライフスタイル

戦後の住宅不足を何とかしなくてはということ、1955年（昭和30年）日本住宅公団が誕生した。さあ、何をテーマに住宅をつくっていくのか。これまでの住宅の問題点は何なのか。担当者が目指したのが欧米のライフスタイル。

①食寝分離

食べる場所と寝る場所を分離する

②二寝室

親子の寝る場所を分離する

③ダイニングキッチンでのイス座の食事

それまでは、都会の多くの家庭では、食べる場所と寝る場所は同じ。食事をするときは畳の部屋にちゃぶ台をひろげ、寝るときはそれをたたんで布団を敷いて、親子川の字で就寝する。

これではダメだ。食べる場所を専用にしなればいけないということで生まれたのが「ダイニングキッチン」という欧米のスタイル。このダイニングキッチンが、日本の住宅の転機になったのは間違いない。それまで、台所といえば北側のじめじめした薄暗いところ。水を扱う、食品が腐りにくいという利点はあるものの、女性の位置が低かったことも大きな要因。その台所が、南に面した明るく暖かく、清潔な場所に変貌したのだ。

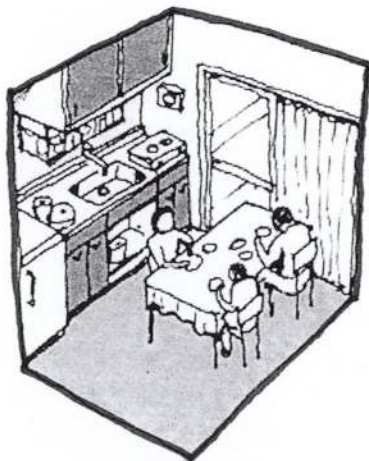


図1 住宅公団のキッチン

■ピカピカのステンレスシンク

そのダイニングキッチンにセットされたのが、ステンレスシンクの流し台。それまでの一般の家庭の流し台といえば、木の板で水槽を作り、ブリキの板を貼ったものか、コンク

リートの研ぎ出し、またはタイルのもの。ステンレスの流し台もあるにはあったが、溶接の手間がかかり非常に高価で高嶺の花。

このピカピカのステンレス製のものを何とか公団住宅に採用できるように安くできないかとつくられたのが、プレス工法による継ぎ目のないシンク。価格は従来の3分の1になり、その後の流し台のベースとなるのだ。

■シンク部、調理部、コンロ部の配列

すべてが新しいことばかり。その中で起きたのがレイアウトの論争。公団の流し台は、どういう配列がいいのか。女性建築家の浜口ミホ氏は、シンクを調理部とコンロ部の間にレイアウトすべきだと主張するのに対し、家政学会は調理部をセンターにすべきだと主張。どちらにするか実際に料理を作って、確認をした。

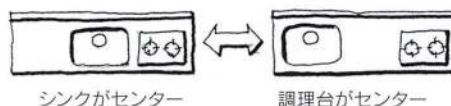


図2

結果は、ほとんど移動せずに調理ができた浜口氏の圧勝。公団の流し台は、シンクがセンターで始まった（その後、ほとんどのキッチンは調理台をセンターにしている）。「人間工学」という学問が一般に知られるきっかけになったと言われている。

■間口対応のキッチン

公団スタイルのダイニングキッチンは憧れの的となり、一般の住宅にも普及してゆく。

江戸間・京間・中京間などモジュールの異なる住宅に対し、流し台の寸法も対応していかなければならない。一体になっていた流し台、調理台、コンロ台が別々になり、それぞれが寸法のバリエーションを持ち、積み木のように組み合わせて寸法に対応する。レイアウトもI型だけでなく、L型、U型にも対応できる「セクショナルキッチン」となっていく。

■ダイニングキッチンか独立キッチンか

昭和40年代は、キッチン家電が普及する。炊飯器、トースター、ポット、さらに電子レンジが参入。キッチンは家電品でいっぱいになってしまう。それでなくても、和・洋・中

華を料理する調理器具、食器などであふれてしまっている。今まで、6畳のダイニングキッチンで食事していたテーブルは、たちまち家電品の置き場になり、食事は茶の間や別の部屋でと、昔に逆戻り。

そこで出てきたのが、キッチンは独立すべきだという考え方。「キッチンは、煙、におい、汚れが出るところ。家電はあるし、料理の後の汚れた調理器具や調理ゴミに囲まれて食事なんかしたくない。食事はキッチンと別の部屋のダイニングでしましょう」つまり、料理という「作業の場」と、食事・団楽という「快楽追求の場」を分けようということ。でも、「私はシェフだ。自分の厨房で思いっきり腕をふるうのだ」と決心したお母さんならともかく、やはり普通のお母さんにとってひとりで黙々と料理を作る疎外感は、たまらない。



図3 ファミリーの語源「火を囲む最小の集団」

そもそも、大昔の住居は決まって「火」を住居の真ん中に入れ、その周りで人々が生活をしてきた。「ファミリー（家族）」の語源は「火を囲む最小の集団」だと言われるように（光藤俊夫・中山繁信氏著『すまいの火と水』彰国社）、やはり、料理をする場所（火）を囲んで団楽するというのが、家族のあり方ではないだろうか。

■システムキッチンがキッチンを変えた

ドイツでは、戦後、国を挙げて産業の復興に取り掛かった。その一つがシステム家具・システムキッチン（ビルトインキッチン）の開発。

木材の不足のため、端材や間伐材を細かく砕き、接着剤を使って板状にプレスした、キャビネットの材料、パーティクルボード。ヒンジやレールなどの金具はすべて規格化。取

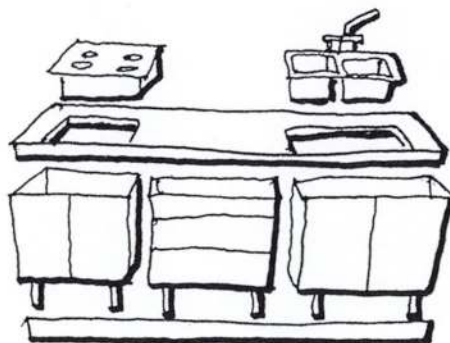


図4 システムキッチン

り付け穴のピッチを8mmの倍数とした。ビルトインする機器の寸法も統一。文字通りのシステムキッチンを作り上げた。

そして、1973年（昭和48年）、ドイツのキッチンメーカーが、日本にショールームを展開した。飾られていたのは、まばゆいばかりのシステムキッチン。トップ（天板）は、ぶつ切りのステンレスでなく、1枚のメラミンの化粧板。なんと美しいデザイン。今までのキッチンとはまるで違っている。

システムキッチンが変えたのは、単に材質や意匠でなく、キッチンは単なる作業場でなく居住空間なのだ、部屋全体を美しくするのだというコーディネート概念なのだ。

このシステムキッチンは、誰もがあこがれた。そして、日本のメーカーも次々と販売に乗り出していった。

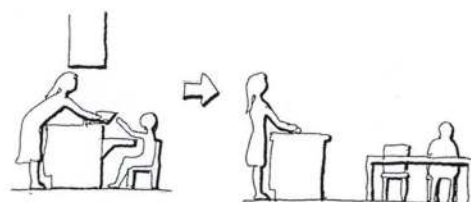
■オープンキッチンが主流になるか

1990年代になると、対面型キッチンがブームになる。マンションの間取りを見ると、かなりの割合で対面型レイアウト。独立キッチンとダイニングルームの間の壁に窓を付けたというイメージ。独立キッチンの閉塞感を一気に解決。

その対面型キッチンにはカウンターが付き、お母さんが子どもたちに食事をキッチン側からサービスするというシーンが設定された。壁に向かって料理をしていたお母さんたちは、子どもの顔を見ながら料理ができるキッチンのスタイルに飛びついた。しかし、長くは続かなかった。カウンターで食事するのは、朝食に限られる。夜はお母さんもテーブルを囲んで食事するのは当たり前。いつのまにかカウンターは、家電品などの置き場と化し、ダイニングが雑然となってしまう。

やっぱり対面型キッチンはダメか……と思

っていると、形を変えて復活。カウンターがなくなり、天井から下がっていた吊戸棚もなくなり、キッチン部とダイニング部との境界があいまいになり、完全なオープンキッチンへと進化する。料理のプロセスを見せるテレビ番組も増えてくる。「オープンキッチンにして、子どもたちやお友達に料理をしているのを見せるのも悪くないわねえ」



初期の対面型キッチン

進化した対面型キッチン

図5

キッチンにビルトインされる機器はオープンキッチンにふさわしいように進化する。テーブル感覚のように、一拭きできれいになるガラストップのガスコンロやIHクッキングヒーター。タイマー設定ができ、音が静かで鍋などが洗える食器洗浄機。キッチントップが汚れない、濡れない、拭きやすいという仕様になってくる。

さらにIHクッキングヒーターを使えば排気もきれいで煙も出ない。下引きのレンジフード（空気清浄機）を使えば天井吊りのレンジフードもなく、部屋のセンターに置いてしまう商品も出現。まるでテーブル感覚だ。

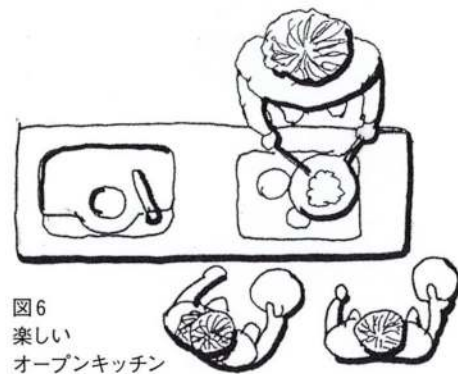


図6
楽しい
オープンキッチン

料理に対する考え方も違ってくる気がする。壁に向かって黙々と料理する姿は、何か悲壮感がただよい、仕方なく義務でやっているイメージがあるのに対し、オープンキッチンは、遊びで楽にやっているイメージ。日常でなく非日常。「もっと気楽に料理をやろうよ」「生活を楽しくね」というメッセージが込められているような不思議な魅力があるように思える。

（くろだ きよし）



大阪・京橋にある金魚すさび店内

はやる飲食店の デザイン

(株)スーパーマニアック代表取締役
インテリアデザイナー
商環境プロデューサー

今福彰俊

1968年生まれ。

国内外において飲食店をはじめ、商業施設、物販店等を中心に商空間デザインを手がける。マーケティング思考を軸に一貫して流行る店舗づくりにこだわり、空間デザインのみにとどまらず、マネージメント計画からブランディング、販促計画まで、幅広い活動を行っている。

著書に「CONCEPT産出」(カナリア書房)。

はやる飲食店のデザイン。それを一言でいうなれば、僕はバランスだと言いたい。オーナーの理念や思いから始まり、僕たちとの出会いを通じて産出されたコンセプトをもとに、地域性や立地、そのお店の力量、さらに、そこに集うであろうお客様に対して、お店が提供しようとしているメニュー内容、客席数と客単価、回転率、オペレーションの在り方やサービスの質など、それらのトータルなバランスに基づいてデザインはされるべきであるというのが僕の持論である。だから正直、よく本に載っているような定義なるものは存在しないと考えている。その時々「状況でデザインは決定される」と思うからだ。裏返せば、クライアントがお客様に提供しようとしている内容を、僕たちが100%理解しなければならないということである。だから僕たちは試食にも参加するし、プライシング(価格戦略)や販促計画などもヒヤリングする。その上で、場所性を加味し、客席数の決定や回転率を予測し、そのお店自体の「間」を考えていくのである。

また、デザインをしていく上で大切な要素として、「時流を肌で感じているかどうか」も重要であると思う。肌感覚という極めて抽象的な感覚であるが、今これがイケている、イケていないというジャッジができるか、できないかである。僕たちを取り巻く環境は常に時流という時の流れで動いているので、今なにがイケていて、次になにがきそうか？これを肌で感じることが重要であると思う。この感覚がずれていたり、感じられなくなった時が、僕の引退の時期だとも思っている。それぐらい、店舗にかかわるデザイナーや建築家にとって、この感覚は大切であると思う。

■今、はやっているものは 既に衰退が始まっている

ここで、時流の見方を検証してみたい。時流は必ずやり、すたりを生みだす。その中で「今、はやっているものは既に衰退が始まっている」ことを忘れてはいけない。常に時流は回帰を繰り返している。もちろん回帰してきた時点で前のままということではなく、流行した当時の流れはそのままに、「形は今

という時代感覚を取り入れつつ回帰を繰り返すのである。そんな中で今、流行の絶頂を迎えている業態やデザインは既に衰退が始まっていると考えるべきである。なぜかと言えば、はやるイコールそこに人が集まる。それを見た二番煎じ、三番煎じが次から次へと現れ、一気に飽和状態になる。お客様も最初は群がるが、飽和状態で、どこに行ってもそれは存在する訳であるから、すぐに飽きられてしまう。すると急速な衰退速度で淘汰が始まるのである。だから今はやっているものは既に衰退が始まっていることを忘れてはいけない。

だからといって流行を追ってはいけないということでもない。その流行のポジショニングをよく理解してほしいという意味である。それらを踏まえて、どこまで時流を取り込むかの検討が必要であるということである。それと僕たちは常に流行だけを見るのではなく、その流行の裏に潜伏している潜在需要に注意をはらうようにしている。俗に言う「カウンターカルチャー」である。時流回帰する中で、流行の先端にある「うねり」が大きければ大きいほど、時代は次を求める欲求が大きくなる。そこで、今はやっているものの裏でくすぶっているものがカウンターカルチャーである。このカウンターカルチャーこそ、われわれがいち早くキャッチしなければならないものであると思っている。それらを、クライアントに対して「そろそろ、これが面白いから注目しておいて下さい」という具合に情報を入れておくことで、クライアントも次の一手が打ちやすくなるからだ。

■ユニークモダンがおもしろい

ここで、今どんなデザイントーンが市場でうけているのかに触れておこう。長引く不況の影響で施工費用の減少や大型店舗の減少等により、話題を独占するほどの飲食店舗は確実に少なくなっている中で、アイデアを駆使し、台頭してきているデザイントーンがユニークアートのまたはユニークモダンなデザインである。どこかクスッと笑えるようなユニークだけどカッコいい、そんなデザインが今、一番うけているように思う。一見ごちゃごちゃしていたり、だじゃれの洒落っ気や大阪で言う「ベタやなあ」的な感覚を取り入れ、



いか焼きBAR「空」空」—コーティング加工した干しイカを約200枚貼り付けたファサード(上)と店内(下)かつ計算された洗練さが求められるこの分野は居酒屋業態、ダイニング業態を中心に注目を集めている。しかし、この分野は笑いのセンスが求められるだけでなく、照明計画や素材にまでこだわる必要性があり、簡単に見えるが、かなり緻密な計算があると僕は思っている。また、このデザイントーンは、注目はされつつも、今はまだ時流の先端ではないので、まだ伸びしろのある分野であると思う。

また今、全体的にはやっている業態はというと、生活支援型と言われる低単価の居酒屋やお寿司、串、ホルモンなどが元気がいい。カジュアルなパール形態も依然として強い。これも不況の影響と思われるが、財布の状況に合わせて軽く飲めたり、しっかり食事でもできるといった、その都度のシーンにフレキシブルに対応可能な業態がいいように思う。もちろんいずれも低価格である。

空間ではフレキシブルに空間可変するというのが、ひとつのキーワードかもしれない。例えば普段は個室で、団体が入った時にはちょっとした工夫で広間に変わるというように可変できたり、時間帯別に照明の明るさでお客様のシーンに対応したりと、空間がフレキシブルに可変するということを計画段階から意識しておく、後々クライアントに感謝される場合が多い。

■席数ではなく、テーブル数を見る

今の時代は、多くの来店客をのぞむことが難しい時代になっており、さらにお客様の来店時間も不況の影響で終電には間に合うように計算して来店することが増えているので、どうしても来店時間が以前より集中気味になっている。このような場合、いくら席数を確保していても、合席という訳にはいかない場合が多いので、テーブル数を確保しておく必要性がでてくるのだ。いかに限られた時間内にどれだけの組数を確保できるかが、目標売り上げの成否をわけるといえる考え方である。店舗を構築していく上で、デザインも重要であるが、このような考え方を持ち合わせ、レイアウトを組む必要がある。すべての業態に当てはまらないのは当然であるが、基本、テーブル数をまずは考えていくべきである。

当たり前のことであるが、動線計画も大切な要素となる。よほど小さな店舗以外はスタッフ動線を必ず2動線以上とるようにすべきである。飲食の場合、提供スピードが命取りというところが少なくない。それらを考えると2動線確保は必須となる場合が多い。僕たちはこれらのことを、まずはご来店いただくお客様の視点とそこを使用するスタッフの視点、そして最後にマスコミの視点というものを掲げてレイアウト及びデザインをするようにしている。お客様と提供する側のスタッフの視点は納得いただけると思うが、最後のマスコミの視点？と思われることだろう。マスコミの視点とはマスコミ、特に編集記者の視点を大切にしているという意味である。これはマスコミの編集記者は多くの店舗を常日頃からリサーチしていて、トータルな視座でお店を見る力が養われているし、時流にも敏感なはずであるから、そんなプロの視点で、客観的にその店舗を見られる冷静な視点が商環境デザインには必要であると思うからである。

だから、僕は平面レイアウトができた時点で、まずはお客様になりきってイメージしながら、平面図上を行ったり来たりして、ここでこういう風に接客をうけて、ここに案内されて、こんな料理がでてきて……という具合にまだ見ぬそのお店に来店するシミュレーションを繰り返している。これをお店のスタッ

フになった時に置き換えたり、マスコミの編集記者になったりというように、視点を変えて何度も来店したり、帰ったりを繰り返すのである。そして最後に、再度お客様になって来店し、その時、まわりの人々の笑顔までイメージができた時にはじめて、クライアントにプレゼンテーションするようにしている。

■コンセプトはつくるものではなく生まれるもの

僕は『コンセプト産出』（カナリア書房）という本を書いた。これからの時代を担う若い方々へのメッセージとして書いたつもりである。その中で、最も伝えたかったことがコンセプトの重要性についてである。僕は一貫してコンセプトはつくるものではない、生まれるものであると言い続けてきた。クライアントと僕たちがある奇跡的なタイミングで出会い、互いの力を認め合い、尊重しあい、ある意味、愛しあうことで対話を重ね、そこから産出されるものがコンセプトだと僕は思っているからだ。それはまるで、男女の関係性に似ている。男女の関係も同様にある宇宙的で奇跡的なタイミングで出会い、互いを認め、愛しあうことで自然にSEXをして子を宿し、その子を大切に育てていく。これは僕らがかかわる店舗も同じだと思う。コンセプトの語源がラテン語でconcupere（宿す）であるように、自然発生的に生まれるものでなければならぬと思っている。クライアントを説得するための後付けのコンセプトでは、なんの意味もない。コンセプト産出のためにもっと時間を費やし、その過程を大切にすべきである。

大切な人のためなら人は精一杯の思いやりを費やすように、店舗にも精一杯の思いやりで接することをおすすめしたい。それが、はやる店舗構築の出発点だと、僕は固く信じている。

(いまふく あきとし)



安価、入りやすさを全面に打ち出したファサード



1933年竣工当時のガスビル

ガスビル建築と 食文化活動

大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所研究員

山下満智子

■ガスビルの建築

「大阪瓦斯ビルディング（現 大阪ガスビルディング）」は、工事中の御堂筋に1933（昭和8）年3月竣工し、大阪のシンボリックストリート御堂筋と共に歩んできた。設計と監督は安井武雄建築事務所、施工は大林組。70周年を迎えた2003年に登録有形文化財となった。単に大阪ガスの本社ビルというだけでなく市民の皆さまから今も「ガスビル」として愛される、昭和モダニズムの象徴とも称される名建築である。

竣工時のビル内部の施設として、ガス器具陳列場、ガスビル食堂、料理講習室、喫茶室、講演場、美容室、理髪室、そして銀行や貸事務室などがあり、冷暖房の空調設備も完備し、地下2階には最新式リフトを備えた駐車場もあった。約600名を収容できるガスビル講演場は、当時の最新設備を誇るとてもお洒落なホールで、講演会や映画、演芸、コンサートなど各種の催しが行われ、大阪における文化活動の拠点として常に話題を提供していたという。

■ガスビルの食文化活動

8階に設けられたガスビル食堂は、大阪城をはじめとして市内を一望しながら食事を楽しむことができ、その調理室は最新のガス厨房機器が完備された当時の「業務用モデル厨房」であった。7階には、100人が一度に参加できる料理講習室がお客さまへのサービスの一つとして開設され、大きな話題を呼び、常に満席であったという。また2階には喫茶室、地下1階にはグリルなどがあり、お洒落で手軽なことが受けて、待ち合わせやデート



1933年竣工当時の瓦斯料理講習室の講習風景

の場所、そして楽しい息抜きの場所として多くの人々に利用された。ガスビルは、また近隣の子どもたちにとっては、格好の遊び場でもあった。御堂筋名物の「ガス焼芋」や「ガスビル饅頭」の実演即売は、特に人気で、子どもの頃その実演販売の様子を飽きずに眺めたという話を多くの方から聞く。

竣工当時、大阪における最も近代的で美しいビルディングと称され、建築家・村野藤吾が「都市建築の美の極致」と絶賛したガスビルは、1966（昭和41）年の新旧両ビルの一体化を経て、21世紀を迎えた今もなお近代名建築の一つに挙げられている。

「近代的感覚に満ちたガスビル」建築には、子どもから大人まで幅広い市民に利用される場としたい、そしてガスのもたらす近代都市生活を紹介し、ガス文化の宣伝と普及をはかりたいという当時の夢や熱い思いがこめられた。

その夢や思いは、70年以上続くガスビル食堂や料理講習室運営、様々な料理活動、そして近年では食育活動など大阪ガスの食文化活動、そして社会貢献活動として今に受け継がれてきた。「ガスビル」が歩んだ道は、大阪ガスの食文化活動の歩んだ道でもある。

（やました まちこ）



清新明らかな感じのうちに、万人の味覚をそとる近代式文化食堂、窓の彼方生駒山脈を背景に、大阪城が繪の如く浮ぶ
（ガスビル食堂）

ガラス窓の向こうに、1931年に再建された大阪城天守閣を望む
—1937年のガスビル食堂繪はがきより—

電化調理機器の導入 による店舗設計の 自由度の向上

関西電力㈱お客さま本部
営業計画グループ

■注目される電化厨房

近年、電化厨房機器の普及拡大には、めざましいものがある。その主たる理由として電化調理機器が燃焼を伴わないことがあげられる。余分な排熱や水蒸気、輻射熱の影響を受けることがほとんどないため、厨房内の温度上昇も少なく、空気の汚れも少ない快適な環境で調理ができる。厚生労働省が推奨する『大量調理施設衛生管理マニュアル』（1997年通知）による最適な厨房環境『室温25℃以下、湿度80%以下』を達成しやすく、厨房内の『ドライシステム化の推進』に対しても有効である。

■厨房の省スペース化（立体レイアウト）

電化調理機器は燃焼を伴わず、加熱調理ができることが最大の特徴である。そのため排ガスなどの発生が少なく、安全でクリーンな調理環境が実現できる。燃焼式厨房では難しかった加熱調理機器の上下に冷凍、冷蔵機器、食器棚などを置くという組み合わせも、電化厨房では従来の概念にとらわれずフレキシブルに配置できる。空間を有効に活用する『立体レイアウト』が可能になり、厨房の省スペース化が図れる。厨房がコンパクトにできる分、客席を増やすことが可能になり、売り上げアップにもつながり、経営者にとって大きなメリットになる。

また、厨房内で働く調理スタッフにも効果



IH調理器の上に配置した立体レイアウトが可能



IH調理器の下に「台下冷蔵庫」を組み込み、
効率的な調理作業環境を実現

がある。燃焼式厨房機器では横への動きが多くなるため、作業が複雑になり、調理人の負担が増す結果になっていた。ところが立体レイアウトが可能な電化厨房は、横の動きが少なく上下方向の縦の動きに変わるため、疲れ具合がずいぶん軽減される。空間を有効に活用できる電化厨房は、経営者にも調理スタッフにも、大きなメリットがある。

■進化する換気システム

従来、調理施設では燃焼式厨房機器が主に導入されていた。すなわち室内環境維持のため、調理時には顕熱、水蒸気、油煙、臭気等の排出と、燃焼により発生した一酸化炭素(CO)、二酸化炭素(CO₂)を大量に換気することが必要になっていた。

しかし電化厨房施設においてはCO、CO₂の発生がなく、顕熱、水蒸気、油煙、臭気等の排出が主たる換気システムの目的になる。燃焼式厨房機器に対し、換気量は大幅な削減が可能になり、余分な空調などのエネルギーを使用することなく、快適な厨房環境を維持することができる。また電化厨房においては、燃焼式厨房に適用される建築基準法上の厨房換気設備の設置基準は適用されない。すなわち電化厨房では、厨房室内の環境悪化を防ぐような換気計画をするだけで、快適な空間を実現できるとの考えである。

■まとめ

フードビジネス業界においては、『地球温暖化対策』『改正省エネ法の対応』を重要な経営課題として位置付け、高効率で省エネルギーな生産、調理システムの実現を目指している。こうした課題に対して、熱効率に優れ、余分なエネルギー投入を抑える『電化厨房』は有効である。また、電化厨房と合わせて空気中の熱を有効活用し効率的に空調と給湯を行う『電気式ヒートポンプ空調機』や『エコキュート（自然冷媒ヒートポンプ給湯機）』を組み合わせることで、店舗や建物全体のエネルギー削減につなげることができる。今後もこうしたエネルギー使用の合理化を目指した総合的なシステムをお客さまに提案することで、『環境に優しい社会』の実現を目指していく。

パリの食の風景

～見る・見られるの関係～

京都工芸繊維大学
ベンチャーラボラトリー研究員
博士（学術）

松田奈緒子



フランス人は日差しが体にいいと信じている。日焼けやシミはバカンスを楽しんだ証しでもある

どんなに寒くてもオープンカフェ。店によっては天井に照明兼ストーブが付いていて、オーニングの下はかなり暖かい



パリの街といえば、お洒落でツンとすましたイメージを持っていたが、暮らしてみると、街は活気に満ち、そこには必ず人と食べ物があふれていた。一番驚いたのは、皆が、戸外で飲食を楽しんでいることだった。オーニングの付いたテラス席もあれば、道端に椅子とテーブルを並べただけのスペースもある。そこに、所狭しと人が座っているのである。

一方、お店の中は、それぞれ個性的なインテリアが施してあるにもかかわらず、どこもガラガラ。それは、日照時間が短いため、気持ちの良い季節を外で過ごしたいという理由からだと言ったことがある。ところが、真冬でも、人々は外で食事をしていたのである。フランス人のマダムは「タバコを吸うからよ」と言っていたが、それだけなのだろうか。外で食事することを、フランス人がこれほどまでに好むのは、一体なぜなのだろう。

*

かの太陽王、ルイ14世は、食事を公開にしていたという。公人としてすべての生活を公開行事とし、王権の威光を世に示したのである。ヴェルサイユ宮殿は劇場と化し、最低限の服装さえしていればどんな者でも観覧可能であったというのだ。こうして、大衆の目にさらされた食事の作法は、その後、人々のお手本としてヨーロッパ中に伝播していくこととなる。ルイ14世による食事のショー化は、食事のマナーの成立とともに、食事の風景を「見る・見られる」ことに対するフランス人の意識に何らかの影響を与えたのではないだろう

か、と思うのである。

*

さて、テラスでの食事は、食事をする人が見られるだけでなく、食事をする人が街ゆく人を眺めるという関係性も生まれる。これについては、東京でオープンカフェが流行り出した頃に、林真理子氏が「オープンカフェの憂鬱」と題したエッセイを書いている。歩き方が格好悪いと感じている著者は、家に帰るために、オープンカフェを避けて、あみだくじのように、横断歩道を渡って帰らなければならなかったという趣旨のものだった。「見る・見られる」の関係が著者の視点で面白く描かれていて、今でも強く印象に残っている。最終的に、著者は、「見るなら見ろ」と、胸を張ってオープンカフェの前を歩くことにしたとのこと。

*

このように、日本人は自分が楽しむことよりも、他人にどう思われるかを重視しがちである。だから、できることなら中で食べたいと思っている。テラス席に座るのは見られてもいい人か、見られたい人たちである。そもそも、日本の器や食事内容自体が、内に向いているのではないだろうか。やはり、コーヒーカップやワイングラス、白い大きなお皿に盛られる料理は、街ゆく人の目に触れてもおかしくない。さらに言えば、絵になるのだ。これは、東洋人の私の感覚だけれども…。

(まつだ なおこ)

JRの駅高架下の飲食店

飯田 匡

「工場萌え」の著者が「高架下建築」を出版するなど、最近、街のB級スポット?として高架下も注目されているようです。高架下の飲食店と聞くと、並行する道路に面して店が並ぶ様子(写真1)や、阪急梅田駅下の「かっぱ横丁」などをイメージされるかもしれませんが。

しかし、大阪の高架下を探すと、それらとは違う不思議な空間を見つけることができます。例えば写真2は、その名も「トンネル横丁」。JR大阪環状線西九条駅南側にあり、高架下を横断するように飲み屋が並んでいます。ほとんどの店の入り口が路地に面して全面引き戸となっているため、引き戸を開け放つと路地全体が1つの店のようになってしまうそうです。写真3は大阪環状線福島駅のすぐ横を通るJR神戸線の高架下です。ここでは高架に並行して真ん中に長い路地が通っています。軌道に合わせてカーブした路地の両側には、居酒屋、焼肉屋、バー、カレー屋など、いずれも一癖ありそうな飲食店が並んでいます。皆さんもぜひ一度このディープな空間を体験してみてください。



写真1 高架に並行する道路に面して建つ店



写真2 トンネル横丁



写真3 JR神戸線の高架下

「京都」≡「ハツ橋」?

三宅次郎

最初から私事で恐縮ではあるが、小生、関東出身である。中学・高校の修学旅行で改修後の金閣寺の比較検証をしたことが自慢な埼玉県人にとって、京都のお土産といえばハツ橋。きっと3時にはみんなハツ橋とお茶ではんなりと時間をすごしてはるんやなあ、と思い巡らしたものだ。しかし、京都に住み着いてはや21年目、これを書くために「本家西尾ハツ橋・祇園店」でお抹茶と一緒に頂いているわけだが、何年ぶりだろうか。

京都市の観光調査年報(2008年)の「土産品買上状況調」によれば、回答サンプリング数1,215の43.9%がハツ橋を土産品として購入しているとのこと。7年前の同じ調査値が44.8%であったので、文字どおり京都をイメージさせる食べ物として定着している。一般家庭の浸透率は低いが、それはハツ橋に課せられた命題とは関係はない。いかに世界が狭くならうとも、ハツ橋は、京都外の人にとっての「京都らしさ」であり、ある確固たるイメージを認知させる重要な媒体でありつづける。

しかし、隣席の女子チームは、パフェに幸せを見出しているようですが(苦笑)。



本家西尾ハツ橋・祇園店で頂く「京都」

街角を五感でつなぐ

神戸南京町

田中直人

世界の大都市には、必ずと言っていいほど中華街がある。その土地の風土に馴染みながら、自国のアイデンティティや誇りを保持し、市民や来街者に魅力的にアピールする。その魅力の要素のひとつに、五感のメッセージを送る食との出会いがある。派手な看板などの視覚的な刺激とともに、嗅覚や味覚を刺激する食の風景が展開する。神戸には、食の風景として市内の各所にこだわりの中華料理店が点在する。これらのお店とは別に、横浜や長崎などと同じく、異国情緒を味わえる観光のエリアとして整備が進められてきた中華街がある。街の入り口には中国からの本格的な楼門が備わっている。しかし神戸の中華街のことを、なぜかしら神戸の人は「南京町」と言う。すっかり神戸っ子に馴染んだ南京町の風景も、阪神大震災以降は大きく変貌した。被災者の身も心も温めた食の空間が、そのままも活気とにぎわいを持続している。本格的なコース料理だけにこだわらないテイクアウトの屋台群は、新たな食でつなぐ街角を五感で彩っているようである。



においの立ちのぼる屋台の前で



五感でつなぐ南京町の街角

関西の食の風景

まちの小さなたこ焼き屋

守井 辰

その「たこ焼き屋」には店名の表示がない。たこ焼き以外にも焼きそばやおでん、玉子焼き、きんぴらなどの総菜が売られている。近所の主婦やご老人の御用達の店で、通称は「おばちゃんの店」。財布にやさしい価格と素材のうまみを楽しめる飽きない味、それに、おばちゃんのやさしい人柄が魅力だ。

転居するまでの間、「おばちゃんの店」は我が家に欠かせない存在だった。息子二人は赤ん坊の頃から「おばちゃんの店」に通い、育った。息子たちは、おばちゃんとおばちゃんの料理に支えられて成長したのだ。今も二人は「おばちゃんの店」が大好きである。

個人的な見解ではあるが、まちには「おばちゃんの店」のような店が必要だ。個人の顔が見える「食」の商売を通じて、人と人との「つながり」が育まれるからだ。小さな店の持つ社会的な力を再評価し、大切にしていかなければ、私たちのまちはかけがえのないものを失ってしまう気がしてならない。



おばちゃんの店先にはおでんや焼きそばが並び



おばちゃんの店でおばちゃんと

左京区ラーメン通り

松田奈緒子

ひと頃、「ジョージ行こう」と言えば、「ラーメン食べに行こう」という意味だった(池袋を「ブクロ」というのが流行っていた時期)。京都市左京区に位置する「一乗寺(いちじょうじ)」には、通称「ラーメン通り」と呼ばれる通りがある。京都大学、京都工芸繊維大学、京都造形芸術大学、京都精華大学など、様々な大学に囲まれた地域にあり、学生があふれ、路肩には自転車が集まり、重なっている。学生に交じって、普段着の親子連れや、おじちゃんおばちゃんたちもさりげなく街の風景に溶け込んでいる。

鴨だし、魚介だし、玉子めん、豚の角煮、カレー味のから揚げなど、店それぞれの売りがあり、もう一回この味を食べたい、あるいは、今度はあっちの店に行ってみよう、と思わせる引力を持っている。

また、ここは宮本武蔵と吉岡一門による「一乗寺下り松の決闘」の地という、知る人ぞ知る歴史的に有名な土地柄である。少し行けば、詩仙堂や曼殊院もあり、紅葉の季節は大変美しい。油ギトギトとしっとり、どちらも楽しめる珍しい地域に興味を持たれたら、どうぞおこしやす。



夜の「ラーメン通り」



夜の「ラーメン通り」

デパートのB級グルメ

紅谷昇平

デパート地下と言えば高級な食品やスイーツが並んでいるイメージだが、阪神百貨店梅田本店の地下にある「スナックパーク」は少し違う。おしゃれな食品売場の一角で、いか焼きやお寿司、お好み焼き、カレーなど、いわゆるB級グルメのメニューが並び、老若男女を問わず立ち食いスタイルで楽しんでいる。もちろん持ち帰りもできる。

これは、大阪の人には見慣れた風景かもしれない。でも他地域出身の人間には、高級な百貨店と庶民的な立ち食いというスタイルのギャップが新鮮だ。さらに驚くのは、百貨店とは思えない安さ。例えば、いか焼き1枚147円、ちよぼ焼き126円、カレー291円。そばにあるマクドナルドが、高く感じられてしまう。

立ち食いとは言え、さすが百貨店らしいシンプルで心地よい空間であり、早い、安い、うまい、きれいで五拍子そろっている。大阪を案内する機会があれば、コースに組み込んでみてはいかがだろうか。



デパートで楽しむ
関西のB級グルメ

食の風景を求めて編集委員が歩く

●飯田 匡
大阪大学大学院
講師
●三宅次郎
阪神電気鉄道(株)
不動産事業本部
●田中直人
摂南大学教授
●守井 辰
(株)日建設計
プロジェクト
開発部門
●松田奈緒子
京都工芸繊維
大学
研究員
●紅谷昇平
(財)人と防災
未来センター
研究員

建築行政共用データベース システムの供用開始

久保博史

財団建築行政情報センター企画課長

財団法人建築行政情報センター（ICBA）では、平成19年度より国庫補助を受け、建築士及び建築士事務所、建築物のストック情報等を集約し、総合的に管理するデータベースとして、「建築行政共用データベースシステム（愛称：建索くん）」を構築し、今春より建築確認現場での供用を開始した。

建索くんでは、建築行政情報のインフラとして、次の5つのサブシステムを構築した。

（1）建築士・事務所登録閲覧システム

従来、国、各都道府県で個別管理されてきた一級・二級・木造建築士名簿及び建築士事務所登録簿の情報をすべて集約した。他のサブシステムに先行して、昨年4月より、国、全国都道府県で利用中である。

このサブシステムにより、全国建築士名簿及び建築士事務所登録簿の一括検索が可能となり、国、都道府県において、管理建築士の専任性をチェックしたり、他県で受けた過去の処分歴をチェックしたりすることが可能となった。今後は建築確認現場への供用により、確認申請時の建築士資格チェックの厳格化への活用が期待される。

設計者等による利用については、今後の国、都道府県における行政サービス開始時期によるが、インターネットによる登録事項変更届提出や、建築士免許証カードへの講習受講履歴等の埋め込みなどが可能となるよう検討中である。

（2）台帳・帳簿登録閲覧システム

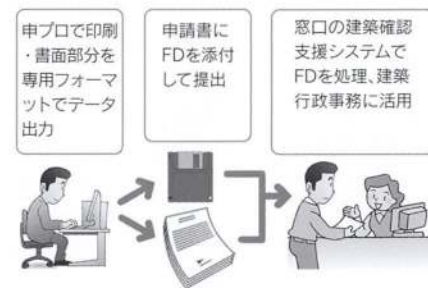
建築計画概要書記載情報をはじめとする全国建築物のストック情報を、特定行政庁及び民間確認検査機関の両者により電子台帳として蓄積するためのインフラとして整備した。建築物のストック情報はデータベース化が進みつつあるものの、その内容や電子ファイルのフォーマットは統一化されていないのが現状である。今後、台帳・帳簿登録閲覧システムの建築確認現場での運用を通じ、順次、統一フォーマットでの電子化が進むと思われ

※新しい申プロと今後のFD申請

現在、特定行政庁及び民間確認検査機関（一部を除く）では、建築確認のFD（フロッピーディスク）申請の受付が可能となっている。これまでのFD申請は、建築確認申請書の書面部分を対象に、専用フォーマットでデータ出力したFDを、確認申請書に添付して提出するものである。データ出力には、ICBAの提供する建築確認申請書作成プログラム（申プロ）等が利用されてきた。

提出されたFDは、窓口を設置された「建築確認支援システム」によって処理され、建築行政事務に活用されている。

〈これまでのFD申請〉



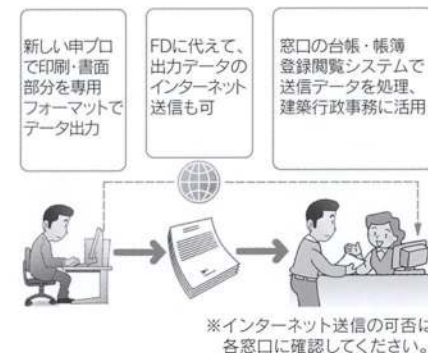
今後、窓口の「建築確認支援システム」は3年

ほどの期間をかけ、順次「台帳・帳簿登録閲覧システム」に刷新される。

これに伴い、ICBAは、台帳・帳簿登録閲覧システムで受付可能なデータを出力するための新しい申プロの提供を開始する。

新しい申プロでは、FDだけでなく、インターネットによるデータ送信も可能となる。

〈今後のFD申請〉



なお、送信されたデータは窓口入力業務の補助的なものであり、データそのものを原本とみなすオンライン申請とは異なる。

る。

統一フォーマットでの電子化の進展により、建築物に係る事件・事故が発生した際、調査対象となる建築物を瞬時に捕捉し、当該建築物の建築確認・検査・定期報告等のデータを分析することで、安全対策や違反建築物対策の迅速化が可能となる。

（3）通知・報告配信システム

民間確認検査機関から特定行政庁に対する、確認済証や検査済証等の交付の通知・報告を通じ、各民間確認検査機関に蓄積された建築物のストック情報を、所管の特定行政庁に配信するためのネットワークの拠点を構築した。この拠点到、台帳・帳簿登録閲覧システムのほか、各特定行政庁及び民間確認検査機関のアプリケーションを接続することにより、今後発生する建築物ストックのデータベース化を推進するものである。

これにより、民間確認検査機関による確認・検査の情報をリアルタイムに近い形でとらえ、未検査物件を把握することで、確実な中間検査・完了検査の実施等が可能となる。

（4）道路情報登録閲覧システム

二項道路等、建築敷地前面道路の指定状況のデータベース化を支援するアプリケーションである。道路指定状況のデータベース化は、まだ緒についたばかりではあるが、このシステムによるデータベース化の進展を見据え、将来は、全国規模の指定道路状況をどこからでも照会できる環境の整備を目指す。

（5）建築基準法令データベース

建築基準関係法令について、建築基準法制定時からの改正履歴をデータベース化し、今後の法令改正も蓄積する体制を整備した。

住宅の高耐久化指向が強まる昨今、今後ますます改修工事や増築工事が増加するものと思われる。その際、設計者においては、建築確認手続きのため、新築時の法適合状況を把握する必要がある。このことは、建築確認審査を行う特定行政庁、民間確認検査機関側でも同様である。

しかしながら、頻繁に改正される膨大な法令集を管理するのは、保存スペース的にも検索手間の上でも問題がある。このサブシステムは、このような問題を解消する極めて有効なツールとなる。

利用方法 設計者等を対象に、建索くんサブシステムのうち、新しい申プロと建築基準法令データベースを、「ICBA情報会員」（有償）の特典として提供します。ICBA情報会員は、下記サイトよりお申し込みください。
URL: <http://www2.icba.or.jp>

特定行政庁及び民間確認検査機関による建索くんご利用申し込みは、下記にて受け付けております。

お問い合わせ

財団建築行政情報センター企画部

TEL 03-5225-7706 dbinfo@icba.or.jp

（くぼ ひろし）

超耐候性 4 フッ化型遮熱
塗料ゼッフル™遮熱工法

村井俊子

ダイキン工業㈱化学事業部塗料事業推進部

ゼッフル遮熱塗料は、太陽光を反射して塗装表面の温度上昇を抑えることで、空調負荷の低減、CO₂排出量の削減が期待できる「環境対策に貢献するフッ素樹脂塗料」として展開を進めている。

ゼッフル遮熱塗料を塗装する『ゼッフル遮熱工法』は、温度上昇を防ぐ目的で、工場や事務所の屋根や船舶の甲板に採用されている。本製品は、「劣化しにくい」「錆びにくい」「汚れがふき取りやすい」というフッ素樹脂塗料の性質により、反射性能を長期間維持し、塗り替えの頻度を減らして省エネルギーに貢献できる。

フッ素樹脂塗料の種類

もともと、フッ素樹脂塗料は耐候性塗料として、高層ビルや施設などに使用されている。フッ素樹脂塗料と一口に言っても、2Fタイプ、3Fタイプ、4Fタイプと3つの種類がある(図1)。これらの違いは、樹脂の中のフッ素の結合数によるもので、ダイキン工業は唯一4Fタイプの樹脂塗料を生産している。

4Fタイプ	3Fタイプ	2Fタイプ
常温乾燥型、高温乾燥型		高温乾燥型
$\begin{array}{cc} \text{F} & \text{F} \\ & \\ \text{---}(\text{C} & \text{C})\text{---} \\ & \\ \text{F} & \text{F} \end{array}_n$	$\begin{array}{cc} \text{F} & \text{F} \\ & \\ \text{---}(\text{C} & \text{C})\text{---} \\ & \\ \text{F} & \text{Cl} \end{array}_n$	$\begin{array}{cc} \text{H} & \text{F} \\ & \\ \text{---}(\text{C} & \text{C})\text{---} \\ & \\ \text{H} & \text{F} \end{array}_n$

図1 フッ素樹脂塗料の種類

フッ素の含有が多いほど樹脂の耐候性は上がるため、4Fタイプは、フッ素の特徴が最大限発揮される。現在、この4フッ化型耐候性フッ素塗料は、東京ドームホテルや六本木ヒルズなど数多くの物件に採用されている。

ダイキン工業では、この耐候性に優れた4フッ化樹脂塗料の中に遮熱効果のある特殊顔

料を混ぜ合わせることで、4フッ化型遮熱塗料であるゼッフル遮熱塗料を開発した。

効果

2006年に塗装されたダイキン工業関係会社(約600㎡)の遮熱効果を測定した結果、屋根裏面温度で最大20℃の低下が見られた。また、使用電力量で10kWの削減と夏季(6月から10月の5ヵ月)の電気料金で約30万円の削減効果が確認された(図2、3、4)。なお、同社は、ガルバリウム鋼板から塗装色をスノーホワイトに塗り替えた。塗装色によって効果は変わる。

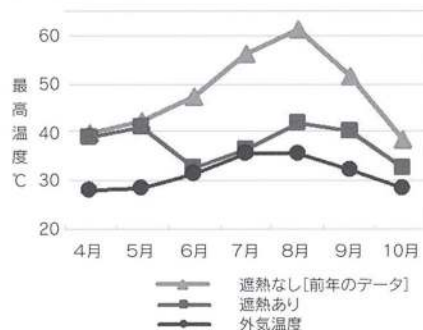


図2 屋根裏面温度の推移

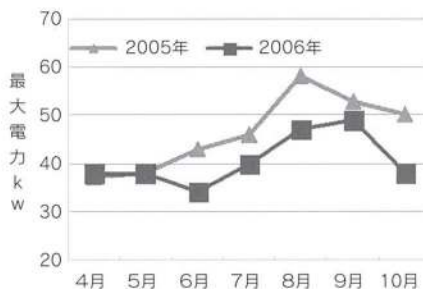


図3 電力量の推移

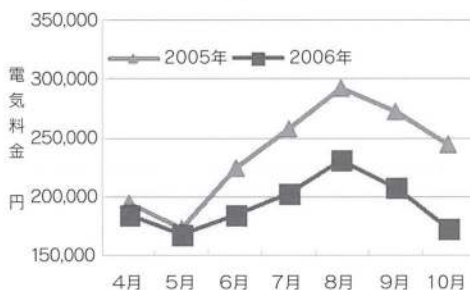


図4 電気料金の推移

原理

太陽光から降り注ぐ光は、物質に当たると吸収、振動を経て、熱エネルギーへと変換される。「ゼッフル遮熱塗料」は、遮熱効果の

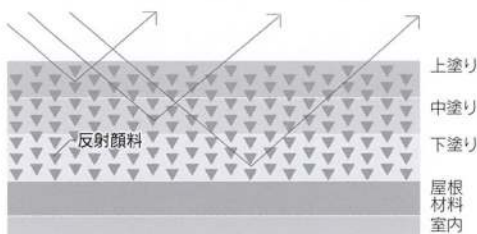


図5 遮熱の原理

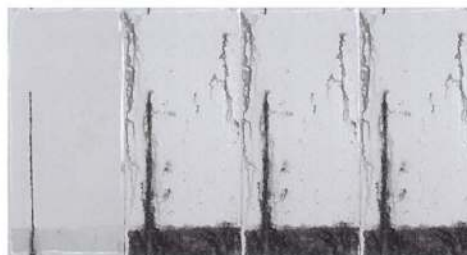
高い顔料(酸化チタンなど)を用いることで、太陽光を反射して熱に変えにくいという原理(図5)で遮熱効果を付与している。

特徴

塗料の樹脂成分にフッ素を使用することで、優れた耐久性と防食性(防錆効果)を発揮する。白顔料(酸化チタン)は、太陽光が当たると活性化し、有機物を劣化させチョーキング(白い粉が吹く現象)が起きる。フッ素を用いることでエポキシ系やアクリル系に比べ、チョーキングが起きにくく、15~20年の耐久性が期待される。

4フッ化樹脂塗料は、高い防食性があり、塩害による腐食対策にも優れた塗料である。海上橋梁、港湾ガントリークレーンへ採用されている。

塩水噴霧試験2000時間後の実験結果(写真1)を示す。写真左側のゼッフル遮熱塗料では、塗装した金属板と外気が直接接触するように切れ目を入れた部分以外では、錆びの発生が見られない。



左側 : ゼッフル遮熱塗料、中央左 : 合成樹脂系塗料

中央右 : エポキシウレタン系塗料

右側 : 防食処理なし

写真1 防食性の実験結果

今後の採用に向けて

ゼッフル遮熱塗料は建屋の空調負荷を低減して省エネルギーに貢献するとともに、新用途として、石油タンクやケミカルタンク、タンカーに塗布することで、揮発ガスの削減効果が確認されており、大気汚染対策としても注目されはじめています。



写真2 工場屋根塗装事例

今後も、本製品の普及をはかり、環境対策に貢献していきたい。

(むらい としこ)

大阪市立美術館

植松 清志

再読

関西近代建築
モダンエイジの建築遺産

■美術館建設時の大阪市

大阪市は、明治初期の銀目や蔵屋敷の廃止などで大きく衰退したが、その後、紡績業やガラス工業などの発展に伴って商業・金融・交通などが発達し、工業都市としての様相を備えるようになった。

大阪市が美術館の建設を決議した大正9年(1920)には財政上の余裕も相当に生じ、同14年4月には、隣接地域を市に編入する第2次市域拡大が実施され、「大大阪」として東京市をしのいで日本一、世界第6位の大都市となった。しかしその頃の状況を本誌¹⁾では、大阪は経済の都、生産の都として発展してきたが、文化的には空疎で満たされぬものがあった、との記述がある。また、美術館の建設については、心の余裕ができたためと評していることから、生活の向上とゆとりが文化を求めた世相が窺われる。

■設計はコンペで

本美術館の設計案は、設計競技(コンペ)に付された。大正9年11号の『建築雑誌』に掲載された、「大阪市美術館新築設計図案懸賞募集」には、本美術館の目的が、①美術品の収集保存、②一般の鑑賞に供する、③美術家および美術研究家の参考に資して芸術の向上普及と掲げられている。市が示したコンペの条件に対し、建築学会は、①敷地の不確、②審査員氏名の不明を指摘し、「大阪市長に対し質疑照会中」としているが、募集規定の第20条に、敷地は「大阪市内高燥な地域とす」、建物は「西方を正面とす」と明記されており、この時点で大阪市が現在地を想定していた可能性も否定できない。

当時のコンペは、略平面図などが与えられたり、階数や軒高が規制された例もあり、実質的には「外観意匠」の競技であったが、本コンペにおいても、階下・階上・地下室の単線平面図3枚と2階建てを示す縦・横断面図が提示されている。

翌10年の『建築雑誌』3月号には、応募総数137点、「工学博士武田五一君、同片岡安君、京都文科大学助教授澤村専太郎君」らが審査にあたり、1等前田健二郎、2等岡本馨、3等権藤要吉の3名を選抜し、その作品が2月26~28日の3日間、中央公会堂で一般公開されたことが掲載されている。

■入選者

1等入選の前田健二郎は、大正5年東京美術学校を卒業、通信省営繕課を経て第一銀行に勤務している。本コンペ入選後、同11年の大阪府庁・府会議堂コンペ佳作2席、同12年の神戸市公会堂コンペでは岡田捷五郎と共同で1等、同年の早稲田大学故大隈総長記念大講堂コンペでも岡田捷五郎と共同で1等と佳作4席、同14年の関東大震災記念建築物コンペ1等、昭和5年の大礼記念京都美術館コンペ1等等、「コンペの前健さん」の異名をとるほど多くのコンペに入選したが、その発端が大阪市立美術館のコンペであった。

本誌大正10年3月号に、入選した平面図と立面図、翌4月号に透視図などが掲載されている(図1~4)。募集規定に示された単線平面図と入選平面図を比較してみると、概ね提示された平面を踏襲している。外観は、中央部を高層とし、壁面をオーダーに見立てた重厚なデザインで、簡略化された様式建築で



外観(現在)

所在地／大阪市天王寺区茶臼山町1-82
設計／大阪市役所建築課
施工／基礎・鉄骨工事…大林組、
鉄筋コンクリート工事…小坂井組
竣工／昭和11年5月(1936年)
構造／鉄骨鉄筋コンクリート造
種別／美術館

図1

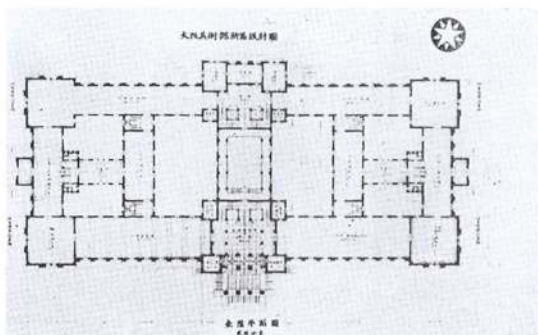


図2

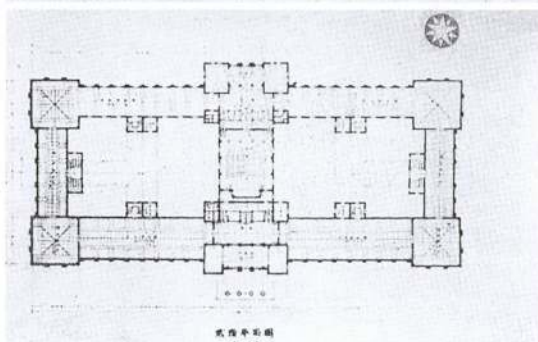


図3

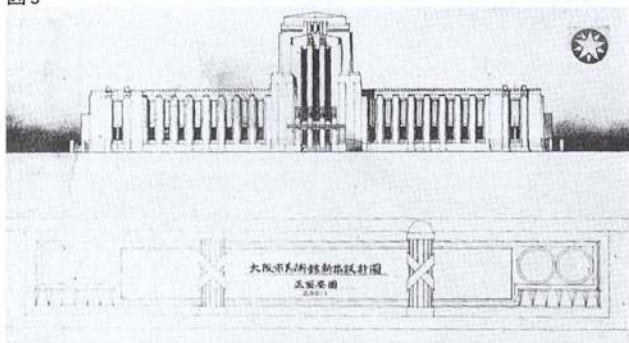


図4

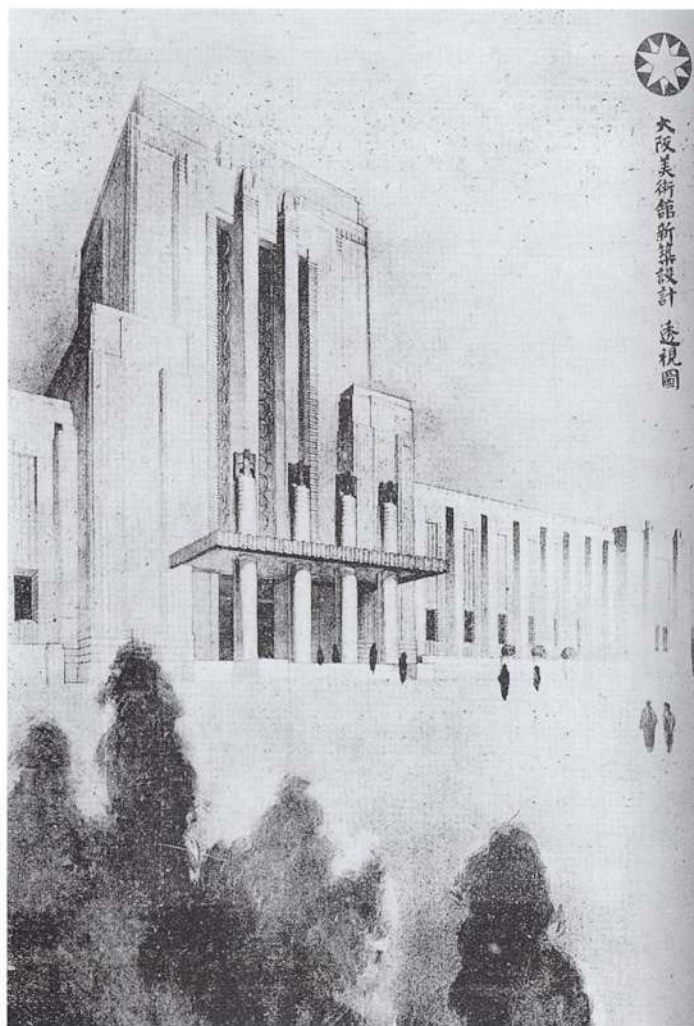


写真1



写真1 (現在)

図5

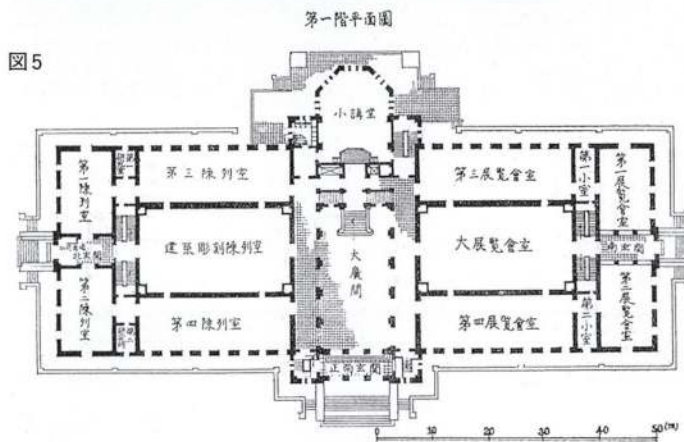


図6

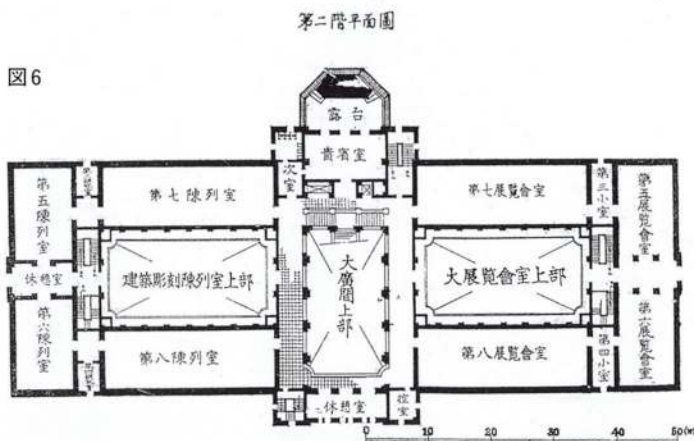




写真2 (『建築と社会』昭和11年6月号より)



写真3 (『建築と社会』昭和11年6月号より)



写真2 (現在)



写真3 (現在)



写真4 (現在)



写真5 (現在)

ある。

本コンペ以後の前田の入選案の多くは、いわゆる帝冠様式によるデザインであるが、これは、募集規定で日本趣味や日本趣味を基調とする東洋風などの意匠が求められたからであろう。外観に日本風の意匠を求めたコンペとしては、大正5年の日清生命保険（株）社屋が初期の例である。前田と岡田が共同で1等入選した早稲田大学大隈講堂コンペの、「1等案はゴシック様式なるべしという大学側の意向と合わず実施ならず」²⁾というコメントから、当時のコンペでは様式が指定される場合があるが、指定の様式以外でも入選していることが分かる。

その後、大正15年の神奈川県庁舎コンペ以降日本趣味が求められるようになり、応募者は、入選を勝ち取るためにその条件に従って意匠を競ったのである。前田自身、前川國男のように、落選を覚悟のうえであえてモダニズムで応募することはなく、設計条件を遵守したのであろう。ちなみに、前田と共同でコンペを戦った岡田捷五郎は、建築家岡田信一郎の実弟で、大正9年東京美術学校を卒業、兄のもとで明治生命館の設計を手伝ったのち母校に戻り、後進の指導にあたっている。

■住友家の土地寄付

住友家の茶臼山本邸は、明治45年（1912）に地鎮祭が行われ、大正4年（1915）にほぼ完成、翌5年の末には洋館の上棟式を行い、同9年にすべての工事が終了した。一方、地鎮祭が行われた同年に、第5回内国勧業博覧会（明治36年）の跡地を利用して天王寺公園が造成され、さらに大正4年には、わが国3番目の大阪市立動物園が開園するなど、この地域の一層の開発に加えて、その後に多発した労働争議や米騒動などから、茶臼山が住友家にとって住み心地のよい場所でなくなったようである。そのためか完成したばかりの本邸を含む敷地を、大正10年末に美術館建設用地として大阪市に寄付を申し出たのである。

住友家本邸の大規模な敷地の寄付である。事前に、大阪市への打診や跡地利用などについて少なからず会議がもたれたものと推測される。その時期は不明であるが、募集規定に示された、高燥な敷地、西方を正面とする建物の条件から、公募の段階ですでに大阪市は住友家から寄付の打診を受けていた可能性を指摘できよう。住友家が寄付するための条件は、①公園とすること、②その一部に美術館を建てることであった。

こうして大正10年末には、美術館の設計案、財政、敷地などすべてが整ったが、同12年の関東大震災によって、大阪市における不

急の事業が延期されることになり、美術館の建設が一時頓挫する。しかし、同14年³⁾に住友家の立ち退きが完了し、慶沢園と命名された庭園は茶室などとともに市へ移管され、再び美術館建設の事業が進められることになった。

■実施設計

実施設計は、大阪市建築課の伊藤正文らが担当した。伊藤は、大正6年早稲田大学を卒業、辰野片岡建築事務所を経て、同13年に大阪市に勤務している。この時期からみると、美術館の実施設計のために大阪市に入所したと思えなくもない。また伊藤は、昭和2年（1927）に上野伊三郎らとともに日本インターナショナル建築会（以下、建築会）の設立に参加している。当時、大阪市建築課には、伊藤や新名種夫、富士岡重一、海上静一など、25名にものぼる建築会の会員がおり、活発に活動していた。

本誌に美術館の記事を執筆した富士岡は、昭和5年に建築課長、伊藤も同7年に主任技師になるなど、建築会のメンバーが建築課の中核を担っている。当時の官公庁にはデザインに優れた技師が集まっており、彼らが公共建築においてモダニズム建築の推進に尽力していた。

■入選案と実施案

入選案と実施案を比較すると、平面は、入選案では、南北方向の2棟の中央部と両端部を、東西方向の3棟で連結し、中庭を区切るように東西方向に特別陳列室などが設けられていたが、実施案（図5～6）では、中庭部分に1～2階吹き抜けの大展覧会室などが設けられて、平面が一体化している。

立面は、入選案が垂直線を強調したデザインであるのに対し、実施案は、中央高層部に本瓦葺きの瓦屋根が設けられ、さらに、中央部両端の凸部にも瓦が葺かれている（写真1）。竣工当時は、入り口の門の幅が広くゆったりしているが、樹木が未生長である。現在は、入り口の幅が狭くなり、樹木が生長しているなどの違いがあるが、当時の雰囲気をよく残している。

壁面は、腰回りを花崗石張り、1階の窓上部までを小形石目タイル張り、軒蛇腹まではリシン塗りとし、仕上材を分けることで水平線が強調され、平滑な壁面が増えている。

外観全体の構成は類似しているが、入選案を垂直線が強調された近世式とみるならば、実施案は日本趣味を基調とした近代式⁴⁾で、全体の印象が大きく異なっている。

当時、モダニズムを推進する技術者が多か

った大阪市建築課が、「日本趣味」を意識した外観としたことに興味を覚えるが、その要因として、例えば、慶沢園を残す住友本家の跡地利用、当時の建築界が日本趣味を求めた風潮などが考えられよう。

完成までに数奇な運命をたどった本美術館であるが、竣工当時の美しさを今に残している。また、慶沢園は、都心の庭園とは思えないほど静寂で、池に映る美術館の姿も、樹木が大きく生長した以外、竣工当時と変わっていない（写真2）。内部はコンペ案では不明であるが、玄関ホール・階段も当時の意匠がよく残されている。ただし、当時の写真に見られる梁端部のハンチが現状では見られないことに、改修の痕跡が窺われる（写真3～4）。

公募の際の条件であった西側正面からは、眼下にリニューアルされた動物園、通天閣、新世界などが広がり（写真5）、急速に開発・発展した当時の様子が窺われるとともに、日没時にはシルエットの美しさが醸し出される。夕日の美しい現地で西側を正面とするのは的を射たことで、このことから、公募当時、大阪市は当地を建設予定地として想定していたと思われるのである。

註

- 1) 『建築と社会』（昭和11年6号）
- 2) 近江榮『建築設計競技 コンペティションの系譜と展望』（鹿島出版会、昭和61年）
- 3) 坂本勝比古『日本の建築 明治大正昭和5 商都のデザイン』（三省堂、昭和55年）。しかし、『建築と社会』昭和9年8月号には大正15年末、同11年6月号には大正15年とある。執筆者はどちらも富士岡重一である。
- 4) 『建築と社会』昭和9年8月号では「近代日本式」、同11年6月号では「日本趣味ヲ基調トセル近代式」とあり、当時の意匠の呼称の変化が窺われる。

引用・参考文献

- 『日本の建築家』（『新建築』1981年12月、臨時増刊）
坂本勝比古『日本の建築 明治大正昭和5 商都のデザイン』
近江榮『建築設計競技 コンペティションの系譜と展望』
京都国立近代美術館監修『復刻版インターナショナル建築別冊』（国書刊行会、2008年）
『建築と社会』（昭和9年8月号）
『建築と社会』（昭和11年6月号）
『建築雑誌』（大正9年11月号）
『水都の風景』（大阪府教育委員会、2004年）

（うえまつ きよし／大阪人間科学大学
環境・建築デザイン学科教授）

橋爪 紳也

—HASHIZUME SHINYA—



学歴

- 1986年 京都大学大学院工学研究科修士課程修了（建築学専攻）
- 1990年 大阪大学大学院工学研究科博士課程修了（環境工学専攻）

経歴

- 2008年 大阪府立大学産学官連携機構教授、同大学観光産業戦略研究所所長、大阪市立大学都市研究プラザ特任教授
- 2009年 大阪府立大学21世紀科学研究機構教授

主な活動

- 国土交通省近畿地方整備局近畿圏広域地方計画学識者会議委員
- 大阪府特別顧問・政策アドバイザー（水都・都市景観分野）
- 大阪府文化振興会議会長
- 大阪商工会議所都市再生委員会副委員長
- 財団法人大阪観光コンベンション協会アドバイザー
- 中之島水辺協議会会長
- 上海万博大阪出展実行委員会プロデューサー
- 大阪コミュニティツーリズム推進連絡協議会総合プロデューサー
- 大阪ミュージアム構想企画委員長
- 大阪検定企画会議座長
- 社団法人日本建築協会主催 大阪「かくれたえとこ」再発見コンクール審査委員長

主な著書

- 『倶楽部と日本人』『大阪モダン』『集客都市』『明治の迷宮都市』『ゆく都市くる都市』『モダン道頓堀探検』他

受賞歴

- 1996年 橋本峰雄賞
- 1997年 日本ディスプレイデザイン研究賞大賞
- 2005年 エネルギーフォーラム賞優秀賞
- 2009年 大阪活力グランプリ特別賞

聞き手 根木和人（東畑建築事務所）
写真撮影 河合止揚

「まち」は誰のためにあるのか

この問いを原点に新しい切り口で都市文化論を展開し、街づくりに鋭く切り込む。「都市には、そこに住もう人だけでなく、働く人、遊ぶ人、いわば様々な『街のユーザー』がいる。街に対する意識も様々、街の使いこなし方も様々。しかしこれまで都市は、概して街を均質に捉え、個々の違いを無視した法制度のもとにつくられてきた」と、実態と計画との乖離を憂い、ユーザー本位の街づくりのあり方を模索している。そのためにはユーザーの要求をいかに読み込むことができるかが重要となる。「街づくりの根幹は、何よりもまず、その街に対する個々の思いを交換する場を設けること」。現在研究室を置く船場界隈で街の再生に取り組んでいるが、語り口からその難しさがにじみ出る。「わが街の定義とは一体何か」。都市は住み手だけの所有物ではない。長年住んでいてもその街に愛着のない人もいれば、よそに住居を構えていてもその街に惚れ込んでいる人もい。そんな個々のユーザーの意識レベルの違いを冷静に見極め、ベクトルを揃えていく。それを実現へ導くためには「圧倒的に強力な意志で実現させようとする明確なビジョンを持ったリーダーが必要」と突破する力の重要性を説く。

では目指すべき街づくりとは何なのか。「街のユーザー＝顧客」であり、持続する都市とは顧客を惹きつける魅力を放ち続けることであるという。「クリエイティブな提案をする人たちがいて、自らリスクを負って挑戦している人がいる場所こそ、魅力的な街ではないか」。魅力的な街を創造するための「行動」が魅力を生み、それが他の都市とは違う独自性を放つことにつながるのだ。

現在、大阪府の政策アドバイザーを務めている。「都市や建築の専門家はもっと政治に対して発言すべき」と手厳しい。さらに、クライアントや事業採算性に束縛されている実態を認めつつも「それでも理想は常に語るべきだし、もっと突き抜けた提案をすべき」と今の時代の閉塞感に苛立ちを隠せない。一方で「世代交代の時代に来ている。もっと活躍するクリエイターが生まれれば楽しい街になる」と、これからの世代に期待を寄せる。

建築史家としても独特の切り口で持論を展開している。高度経済成長まっただ中の昭和30年代半ば、大阪ミナミで生まれ、都市のダイナミックな変貌を目の当たりにしてきた。空想科学に興味があったという氏は、大学で建築歴史に関心を持つ。「古来より日本的な空間の質は、神話などの抽象的概念によって語り、つくられてきた。いわばSFである」。やがて建築史の枠を超えた新しい研究テーマを打ち出す。「我々が生み出してきたもの、とりわけ戦後日本が凄まじい勢いで生み出した都市や建築は何だったのか、壮大な文明史の中に位置づけなければならない」。そのためには今、時代を象徴づける建築や空間造形について正当に評価し、神話化されたメッセージを残すべきであると訴える。その評価対象は、特に時代背景が顕著に表れる商業建築や娯楽施設に向けられ、都市文化論へと相乗されていく。「都市に居る人は、住みたいから居るわけではない。働かなければならないから居るのだ」。都市を「住もう」ことから論じてきたこれまでの常識を覆し、「働く」とことと表裏一体の「遊び」の場の探究から都市の本質に迫っている。

最後に、大阪という街の好きなどころ、嫌いなどころを端的に聞いてみた。「もはや好き嫌いを超越した、我が身体そのものである」。「まち」に込める比類なき情熱が、この言葉に集約されているのを感じた。

Information

▶こども環境学会大会 [広島]

「感性」の主体となるこどもの眼差しで、「アートな感性」「空間の体験」「平和への感性」「感じる手」の4つのテーマを設定し、分科会とワークショップ、及びギャラリーで構成するこども環境学会大会が開かれる。

会 期 2010年 4月22日(木)～25日(日)

会 場 広島平和資料記念館東館、袋町小学校、旧日本銀行広島支店、広島市まちづくり市民交流プラザなど

催 し 仙田満基講演、伊東豊雄講演会とワークショップ、手作り楽器と絵本作りワークショップ、「ユニセフ展イラクのこどもたちの願い」など

こども環境学会会員だけでなく、学生、こども、広島市民、一般の参加も受け付けているので、こども環境学会事務局(千葉市美浜区若葉2-11 放送大学仙田満研究室内、電話/FAX 043-298-4118)へ問い合わせられたい。最新のプログラムは、大会ホームページ(<http://www.sens-of-children.com>)に掲載。

▶(社)都市住宅学会関西支部 2010年度総会記念講演会

(社)都市住宅学会関西支部の平成22年度総会では、「地域との共生・連携にもとづくこれからの住まい・まちづくり」をテーマに、記念講演会を開催する。

日 時 2010年 4月23日(金)

15:30～18:10

会 場 キャンパスポート大阪 ルームD+E
[大学コンソーシアム大阪内]

大阪市北区梅田1-2-2-400

大阪駅前第2ビル4階

講演会 主旨説明/三浦 研(大阪市立大学准教授)

基調講演/「高齢者等居住安定化モデル事業の趣旨と展望」岡崎敦夫(国土交通省住宅局住宅総合整備課住環境整備室長)

講演/「高齢者住宅の現状と課題」米沢なな子(高齢者住宅情報センター長)

参加費 学会員500円、非学会員1000円

学生は会員・非会員ともに無料

定 員 100名(申し込み先着順)

申込み (社)都市住宅学会関西支部事務局

TEL06-6949-5751

FAX06-6949-5741

都市住宅学会会員・非会員の区分、名前、所属、連絡先等の必要事項を記し、事前にE-mail: nakatani@ur-s.jp に申し込む。

▶都市生態系ネットワークづくりへ ～「名古屋 蝶の飛ぶまちプロジェクト」スタート～

竹中工務店は、環境の豊かさの指標生物である蝶の誘致に有効なミニビオトープとなるプランターを名古屋市中区の約10カ所に設置し、2012年11月までの約3年間、飛来する蝶の種類を調査する。この調査結果はいずれ公表し、人と自然が共生できる都市環境づくりに活用していくという。

本調査は、比較的まとまった緑地で蝶の生息場所(供給源)である名城公園周辺と、約2km離れた白川公園の間に点在するビルの外構や屋上などにミカンやアザミなど約20種類の食草や蜜源植物を植えたプランターを設置し、蝶の飛来の有無を調査する。

なお、本活動は、2010年10月11日～25日に開催されるCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)の「COP10パートナーシップ事業(419号)」として生物多様性条約第10回締約国会議支援実行委員会に登録している。

▶屋上開発研究会大阪支部 「関西さきがけ賞」作品募集

特定非営利活動法人屋上開発研究会大阪支部は、2010年度も「関西さきがけ賞」を設け、先駆的な屋上開発を表彰する。

屋上開発が、環境改善のためのCO₂削減、生物多様性の確保といった点も屋上の機能として重要視されているなかで、2010年度の課題として「屋上からはじめるCO₂削減」をテーマに決定し、研究を開始。その一環として講演会も予定している。

問い合わせは屋上開発研究会大阪支部「関西さきがけ賞事務局」まで。

TEL06-6906-5371、sakigake@kanboo.co.jp

<http://www.sky-front.or.jp/>

■「関西さきがけ賞」募集要項

募集期間 2010年 3月15日～ 5月15日(土)

応募方法 屋上開発研究会大阪支部ホームページの申し込みフォームに記入の上、メールにて提出。

<http://skyfrontosaka.web.fc2.com/pg135.html>

提 出 先 屋上開発研究会大阪支部事務局

選考発表 2010年 9月上旬、屋上開発研究会大阪支部ホームページに掲載

審査委員 平田富士男(兵庫県立大学大学院教授)一委員長一

西山潤二(大阪府環境農林水産部みどり・環境室みどり推進課長)

立石 真(屋上開発研究会理事長)

渡部章郎(屋上研究会大阪支部長)

▶ 没後400年特別展覧会 「長谷川等伯」

水墨画の最高峰「松林図屏風」、金碧障壁画の至宝「楓図壁貼付」を描き、豊臣秀吉や千利休を魅了した絵師、長谷川等伯（1539～1610）。

能登の七尾に生まれた等伯は、はじめ「信春」と名乗り仏画を描いていたが、新たな活躍の場を求めて上洛した。肖像画、金碧障壁画、水墨画などを描き分け、やがて狩野永徳率いるトップ絵師集団のライバルとなり、時代を牽引することとなった。

2010年は等伯没後400年。この機会に、国宝3件、重要文化財30件を含む代表作のほぼすべてを公開する。

なお「平成22年度京都春季非公開文化財特別公開」では、展覧会に出品されない等伯作品を、各寺院で公開。詳細は（財）京都古文化保存協会（TEL075-561-1795、<http://www.kobunka.com>）へ。

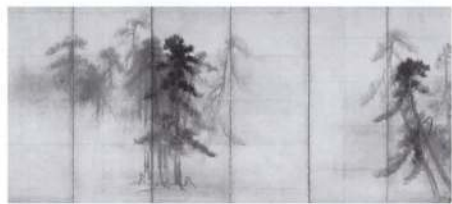
会 期 2010年 4月10日（土）～ 5月9日（日）
9：30～18：00（金曜日は20時まで）
月曜日休館（ただし5/3は開館）

会 場 京都国立博物館（東山七条）
京都市東山区茶屋町527

観覧料 1400円、大高生900円、中小生500円
展 示 松林図屏風（国宝）、楓図壁貼付（国宝）、松に秋草図屏風（国宝）、千利休像、弁慶昌俊相騎図絵馬、仏涅槃図、枯木猿猴図（以上、重文）、新発見の花鳥図屏風など

一部作品の展示替えあり

招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。



国宝の楓図壁貼付（部分）

▶ 韓国の民画と絵本原画展 — 民画と絵本の出会い —

李朝末期から20世紀前半にかけて朝鮮半島の中産階級や庶民の家庭で飾られていた韓国の民画は、旅の絵師によって描かれ、その作風は変化に富み、当時の民俗、風俗、宗教などを反映させた独特の世界を現している。

現在の韓国では、絵本が子どものための新しい情操教育メディアとして脚光を浴びており、子どもだけではなく、大人の心と目をとらえる視覚芸術文化として、昔の「民画」のような位置を占めていると言っても過言ではない。本展覧会は、過去100年の時間の中で変化した



絵本原画
『暗行御使の虎』
ハム・ヒョンジュ 絵
© Hyun-ju, Ham, 2007

てきた韓国の日常的な視覚芸術文化を、「民画」36点と現代の「絵本原画」80点を通して紹介する。

会 期 2010年 4月3日～ 5月23日（日）
10：00～17：00
水曜日休館（5/5開館、翌5/6休館）

会 場 西宮市大谷記念美術館
兵庫県西宮市中浜町4-38

阪神電車「香櫨園」駅南西徒歩6分
入館料 800円、高大生600円、小中生400円

展 示 民画一虎図、花鳥魚蟹図、文字図ほか
絵本原画—お話袋のお話、水宮歌ほか
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶ 鴻池コレクション 扇絵名品展

大阪の豪商・鴻池家の扇の蒐集は一説に数千本といわれる。その多くは、大阪の鴻池合資会社資料室と東京の太田記念美術館に所蔵されている。とくに鴻池家11代善右衛門幸方（1865～1931）が蒐集したものは浮世絵、江戸琳派、円山・四条派など江戸後期の画壇を一望できるものである。

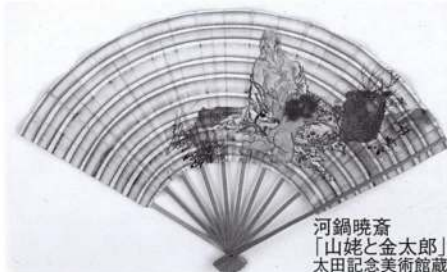
会 期 2010年 4月13日（火）～ 5月30日（日）
9：30～17：00
月曜日休館（ただし5/3は開館）

会 場 大阪市立美術館（天王寺公園内）
大阪市天王寺区茶臼山町1-82

観覧料 1200円、高大生900円
中学生以下は無料 [要証明]

展 示 鈴木基一「彼岸桜」、酒井抱一「雷神」、長沢芦鳳「萩に小禽」、歌川国貞「雪中観梅」など扇絵約300点

招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。



河鍋曉斎
『山姥と金太郎』
太田記念美術館蔵

▶ 「写真家 中山岩太『私は美しいものが好きだ。』レトロ・モダン 神戸」

中山岩太（1895～1949）は1915年、東京美術学校の臨時写真科に入学し、同校を卒業後、ニューヨークやバリーで写真の研鑽を積み、帰



《神戸風景（トアロード）》1939年頃 中山岩太の会蔵

国後は芦屋を拠点に「芦屋カメラクラブ」を創設。また、神戸丸で写真スタジオを開設し、スタジオ、ポートレイト、コマーシャル、観光の分野でも日本の写真史に残る多くの先鋭的な表現を残した。

会 期 2010年 4月17日（土）～ 5月30日（日）
10：00～18：00（金・土は20時まで）
月曜日休館（5/3開館、5/6休館）

会 場 兵庫県立美術館・企画展示室
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

観覧料 1200円、大学生900円、高校生・65歳以上600円、中学生以下無料

展 示 ①「甦る中山岩太—モダニズムの光と影」—残されたガラス乾板から新たに制作したプリントにより《アダム》《長い髪の女》《福助足袋》《神戸風景（雨）》ほかを展示
②「レトロ・モダン 神戸—中山岩太たちが遺した戦前の神戸」—神戸をテーマとしたヴィンテージプリントを展示。併せて小松益喜《英三番館》、小磯良平、金山平三らの絵画、川西英の版画などで戦前のモダン都市神戸の姿を検証

招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

■ 特集展示「絵画の5つの部屋」

特別展「中山岩太展」開催とほぼ同じころ（3月27日～7月4日）、常設展示室では横尾忠則、菅井汲、津高和一、白髪一雄、高松次郎らの絵が5章に分けて展示される。また、小磯良平記念室、金山平三記念室でも展示替えをして、それぞれ約20点を出品中。

観覧料は一般500円、大学生400円、高校生250円、中学生以下は無料、65歳以上は一般料金の半額。

特集展示の招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶大阪歴史博物館「遺跡から見た奈良時代の大阪」

奈良時代、難波の地には難波宮（なにわのみや）が再建され、そのまわりには「難波京（なにわきょう）」があり、周辺には広大な水田もひろがっていた。とくに現在の平野区にある長原遺跡からは奈良時代の水田の跡や灌漑のための大規模な水路が見つかった。

今回は、農村部などの出土品を展示し、奈良時代大阪の多様な生活の様子を紹介する。

会 期 2010年4月7日～5月31日(月)
9:30～17:00(金曜日は20時まで)

火曜日休館(5/4開館、5/6休館)
会 場 大阪歴史博物館 8階特集展示室
大阪市中央区大手前4-1-32

観覧料 常設展料金600円、高大生400円
中学生以下、大阪市内在住の65歳以上は無料[要証明]

出 品 約160点(難波宮出土の鬼瓦、木製農具、石川年足墓誌ほか)

招待券は日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。



人面墨画土器
(平野区長原遺跡出土)
墨で人の顔を書いた土器で、息を吹き込み、封をして川に流し、ケガレを除いたものと考えられる。

▶エドソンコレクション初帰国「柴田是真の漆×絵」

柴田是真(1807～1891)は、蒔絵の下絵を自ら描くために四条派に学び、まず絵師として認められ、のちに江戸随一の蒔絵師の地位を獲得する。明治維新後は万国博等に積極的に出品し、明治23年には帝室技芸員にも任命されている。

是真の洒落なデザインと卓越した技巧は、現在では欧米で高く評価されている。本展では、アメリカのサンアントニオ在住のキャサリン&トーマス・エドソン夫妻が蒐集した是真の漆工と絵画約70点に、日本で所蔵される約20点をあわせて紹介する。

会 期 2010年4月3日～6月6日(日)
10:00～17:00 会期中無休

会 場 相国寺承天閣美術館
京都市上京区今出川通烏丸東入
市営地下鉄烏丸線今出川駅下車

入館料 1000円、大学生・65歳以上800円
小中高生500円

展 示 絵—大雄院襖絵、十六羅漢図
漆—柳に水車文重箱、茄子硯箱
漆絵—鳥鷺図漆絵、「猫図」漆絵画帖
「だまし絵」「だまし漆器」—花瓶梅



The Catherine and Thomas Edson Collection,
courtesy of San Antonio Museum of Art

図漆絵、砂張塗盆

招待券は日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。

▶「冷泉家 王朝の和歌守展」

藤原俊成、定家、為家を祖にもち、宮廷や武家の歌道師範を務めた冷泉家の、京都御所に近い同家の蔵には勅撰集、私家集、歌学書、古記録が収められている。800年にわたり守り伝えられてきたそれらの書物は「冷泉家時雨亭叢書」として刊行され、全84巻が完結した。これを機に、古典籍の精髓が京都文化博物館で展示される。

会 期 2010年4月17日(土)～6月6日(日)
(前期:～5/9、後期:5/12～)
10:00～18:00(金曜日は19:30)
月曜日休室、5/3は開室・5/11は
展示替えのため臨時休室

会 場 京都文化博物館
京都市中京区三条高倉

観覧料 1200円、大高生800円、中小生500円

展 示 国宝の俊成筆『古来風林抄』、定家筆
『古今和歌集嘉禄二年本』『後撰和歌
集天福二年本』『拾遺愚草』『明月記』
ほか重要文化財を含む370点以上が、
前期・後期に分けて公開される

招待券は日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。



古今和歌集
嘉禄二年本
(国宝)
藤原定家筆

▶「ルノワール—伝統と革新」 国立国際美術館で

ピエール＝オーギュスト・ルノワール(1841～1919)の作品を、ボストン美術館、オルセー美術館、ワシントン・ナショナル・ギャラリー、日本のポーラ美術館など国内外から集め、4つの章に分けて展示する。特に、『イレース・カーン・ダンヴェール嬢』は20年ぶりに日本に登場し、大阪展のみの公開となる。

会 期 2010年4月17日(土)～6月27日(日)
10:00～17:00(金曜日は19時まで)
月曜日休館(ただし5/3は開館)

会 場 国立国際美術館(大阪・中之島)
大阪市北区中之島4-2-55

観覧料 1500円、大学生1200円、高校生600円
中学生以下無料

展 示 団扇を持つ若い女、アンリオ夫人、
ブーヅヴァルのダンス、シャトゥー
のセヌ河、水のなかの裸婦、レー
スの帽子の少女、花瓶の花など77点

招待券は日本建築協会(TEL06-6946-6981)へ。



イレース・カーン・ダンヴェール嬢(可愛いイレース)
1880年 E.G.ビューレー・コレクション

▶市民と美術館の対話を!

活動の一環として、伊庭靖子さんの絵画を滋賀県立近代美術館に寄贈する「美術館にアートを贈る会」は、アーティストによるトークイベントを企画。アーティストと美術館の「対話」から、新たに市民と美術館の「対話」を生み出そうとするこの場への参加を募っている。事前申し込み・参加費は不要。

日 時 2010年5月1日(土) 14:20集合
場 所 滋賀県立近代美術館 エントランス
内 容 14:30～/滋賀県立近代美術館学
芸員・山本淳夫さんによるガイド
ツアー

15:00～/伊庭靖子さんによるア
ーティストトーク



電気・空調・電話設備・太陽光工事

ユナトック株式会社

大阪府大阪市東成区中本1-1-6

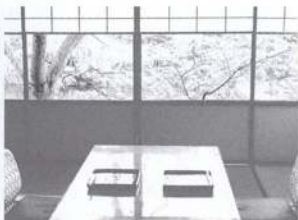
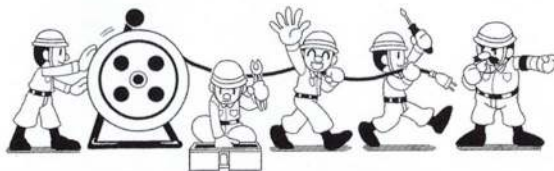
(代)TEL 06(6981)3935

FAX 06(6981)3936

E-mail unatoku@dream.com

ユーザーなつとく

ユナトック



潇洒な迎賓館と由緒ある歴史に彩られた旧男爵邸「淀川邸」
四季折々に豊かな表情を見せる広大な庭園
太閤園のおもてなしを心ゆくまで――



ご 婚 礼

ご 宴 会

レストラン

TAIKO-EN

太閤園

〒534-0026 大阪市都島区網島町9-10
お問い合わせ・ご予約 (06) 6356-1110
<http://www.taiko-en.com>

医療福祉建築賞2009受賞作品

「医療福祉建築賞」は今回で19回目となった。44点の応募（病院21、診療所10、福祉施設その他13）の中、今年は4点（病院3、福祉施設1）が選ばれた。

○特別養護老人ホーム一重の里

…小さな玄関、監視機能のない温かい受入れ雰囲気をはじめとする優しい細やかなぬくもりがある。ユニット外ディスプレイや共同生活空間では、家具が自由に配置されているが、これはスタッフや入所者の手によるもので、個性的な住みこなしが感じられる…。

○栃木県医師会 塩原温泉病院

…温泉を利用するリハ室をはじめ、建設費を抑えながら将来を見越した必要十分な空間を用意したいという施主の願いを、確かに実現した設計者による手堅い病院建築である。

○長谷川病院

…一貫して設計者と施主との十分な協議のもとに統一されたコンセプトで、手を抜くことなく、つくり込まれていることが最大の特徴である。…“このデザインは患者のためになっているか”が設計の判断基準であった…。

○千里リハビリテーション

リハビリテーション・リゾートというコンセプトを打ち出した運営者の気持ちを最大限に生かした質の高い環境サービスが合った建築である。狭小な敷地の中に、中庭や吹き抜けなど複雑に入り組んだ構成であるが、適切な距離感で快適におさまっている。



特別養護老人ホーム 一重の里

所在地 宮城県仙台市太白区秋保町湯元字上原35-8
定 員 特別養護老人ホーム60名、老人短期入所施設30名
延床面積 6,044㎡
竣工年月 2007年4月
開 設 者 社会福祉法人 杜の里福祉会
管 理 者 社会福祉法人 杜の里福祉会
設 計 者 藤佐藤総合計画 東北事務所
施 工 者 奥村組・奥田建設共同企業体
写真撮影 横山写真工房



栃木県医師会塩原温泉病院

所在地 栃木県那須塩原市塩原1333
病 床 数 199床
延床面積 13,489㎡（附属棟除く）
竣工年月 2008年3月
開 設 者 社団法人 栃木県医師会
管 理 者 社団法人 栃木県医師会
設 計 者 藤伊藤喜三郎建築研究所
施 工 者 関・石川建設工事共同企業体
写真撮影 スタジオパウハウス 吉見謙次郎・井上隆司



医療法人社団 長谷川病院

所在地 富山県富山市星井町2-7-40
病 床 数 40床
延床面積 4,661㎡
竣工年月 2006年1月
開 設 者 医療法人社団 長谷川病院
管 理 者 医療法人社団 長谷川病院
設 計 者 基本設計+監修：久保田秀男（広島国際大学）
実施設計+監理：藤日建設
インテリア・家具デザイン：吉川昭（藤日建スペースデザイン）
施 工 者 真柄建設
写真撮影 株式会社ス北陸



千里リハビリテーション病院

所在地 大阪府箕面市小野原西4-6-1
病 床 数 172床
延床面積 7,254㎡
竣工年月 2007年10月
開 設 者 医療法人社団 和風会
管 理 者 医療法人社団 和風会
設 計 者 藤共同建築設計事務所、ランドスケープデザイン：藤E-DESIGN
施 工 者 藤大林組
写真撮影 藤伸和 野口兼史

理事会

第8回常任理事会

2月24日(水) 16:00~17:30

出席者 中井会長ほか6名

- 議 事 (1) 平成22年度事業計画(案)
(2) 平成22年度収支予算(案)
(3) 後援名義等の使用承諾
(4) 21年度第2回総会議案
(5) 役員の推薦依頼について
(6) 建築4団体の大学院生インターン窓口について
(7) その他報告事項

編集委員会

第11回編集委員会

2月17日(水) 18:00~20:30

出席者 設楽委員長ほか4名

- 議 事 (1) 3月号特集「東海支部復活50周年特集 東海-TOKAI オムニバス」の報告
(2) 4月号特集「食と建築・都市」の報告
(3) 5月号特集「医療福祉施設におけるインテリア」(仮称)の報告
(4) 6月号特集「電池」の報告
(5) 7月号特集「建築と石」の報告
(6) 8月号特集「再生・受け継ぐ・繋がる」の報告
(7) 各小委員会・分科会の報告
(8) その他
(9) 収支状況報告

第11回法令分科会

2月17日(水) 15:00~17:00

出席者 鷺尾幹事ほか3名

- 議 事 (1) 「法令コーナー」の企画
(2) 2010年10月号特集の情報
(3) 情報交換

第3回建築系分科会

2月2日(火) 19:00~20:30

出席者 下坂幹事ほか4名

- 議 事 2010年7月号特集企画案検討

第4回建築系分科会

2月16日(火) 19:00~21:00

出席者 下坂幹事ほか2名

- 議 事 2010年7月号特集企画案検討

第7回施工材料分科会

2月9日(火) 17:00~18:00

出席者 桜井幹事ほか5名

- 議 事 2010年11月号特集企画

第10回構造分科会

2月5日(金) 18:00~19:30

出席者 岸本幹事ほか4名

- 議 事 (1) 「構造の頁」の企画

(2) 12月号構造特集

(3) 来年度の構造分科会委員体制

(4) 情報交換

第9回設備分科会

2月3日(水) 18:00~19:40

出席者 赤澤幹事ほか5名

- 議 事 (1) 見学会の企画
(2) 「設備の頁」の企画
(3) 2010年6月号「電池」特集の企画
(4) 新企画の提案

第3回インテリア・住宅系分科会

2月10日(水) 18:30~20:45

出席者 神谷幹事ほか2名

- 議 事 5月号「医療福祉施設におけるインテリア」特集の企画

第4回インテリア・住宅系分科会

2月22日(月) 19:00~20:50

出席者 神谷幹事ほか4名

- 議 事 5月号特集の企画

第11回作品作風小委員会

2月25日(木) 19:00~20:00

出席者 居内副委員長ほか5名

- 議 事 (1) 作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(2) 「gallery」掲載報告・予定
(3) 前回の編集委員会の報告

第11回広告企画小委員会

2月17日(水) 17:00~18:00

出席者 設楽委員長ほか3名

- 議 事 (1) 3月号特集「東海支部」
(2) 4月号特集「食と建築・都市」
(3) 5月号特集「医療福祉施設におけるインテリア」(仮称)
(4) 6月号特集「電池」
(5) 広告掲載状況の報告
(6) 収支状況報告

第11回10年委員会

2月4日(木) 18:30~19:30

出席者 設楽委員長ほか3名

- 議 事 今後の10年委員会の活動

出版委員会

第10回出版委員会

2月18日(木) 18:00~19:00

出席者 上原委員長ほか3名

- 議 事 (1) プロのノウハウと特装本の経過報告
(2) 進行中のテーマ
(3) その他

見学会

「神戸旧居留地25番館」見学会

2月26日(金) 14:00~16:00

講 師 片瀬利行氏/株竹中工務店

参加者 25名

出席者 瀬戸川委員長ほか1名



□訂正とおわび

本誌3月号に、下記の誤りがありました。

P63 (誤) 篠原住則 (正) 山田祐三

P79 (誤) TEL06-4706-4102 (正) 06-6633-7322

(誤) FAX06-6633-7323 (正) 06-6643-7480

関係各位にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

空調・衛生・クリーンルーム設備
(設計・施工)



本社・本店 東京都港区浜松町1-25-7 電話03(3432)5711
大阪支社 大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支店 北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設計施工

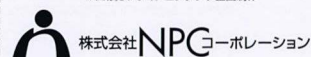


本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話(06)6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話(03)3261-8231
支店 名古屋・福岡
支店 札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・
広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・
福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所 旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店 シンガポール・ホンコン
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話(0492)58-1511



We have hope

■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、
雑誌、文庫、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング、コンサルティング、ITソリューション、
web及びメディアコンテンツ企画制作



株式会社NPGコーポレーション
本社 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel: (06) 6351-7271 (代) fax: (06) 6352-7479
第二ビル 〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel: (06) 6351-0128 (代) fax: (06) 6351-0208
東京支社 〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1
一光浜松町ビル7F
tel: (03) 3433-5211 (代) fax: (03) 5776-7733
(旧社名ナニワ印刷機、日本データネット機)

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛸池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLビル
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA (膨張性混和材)

●デンカラスコン (グラウト用無収縮材)

●デンカキューテックス (止水・補修用急硬セメント)

●デンカES (土質安定用急硬材)

●デンカΣ1000 (製品用超高度混和材)

コンクリートのひびわれ防止に

鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに

コンクリート躯体の漏水補修に

地盤補強用薬注入

コンクリートパイルの早期出荷と
ハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社

近畿地区販売店

浜宗産業株式会社

TEL 本社・京都・京丹後 (0772) 72-2220
舞鶴 (0773) 76-0133

金森藤平商事株式会社

TEL 大阪 (06) 6332-6861
TEL 東京 (03) 3272-8501

小浦産業株式会社

TEL 大阪 (06) 6443-6181

「建築・CG・インテリア」

感性と技術のバランスのとれた真のプロを育成します



【設置学科】

- 建築学科(昼間2年制)
- 空間CGデザイン科(昼間2年制)
- インテリアデザイン科(昼間2年制)
- イブニングクラス建築学科
(夜間2年制)
- 研究科(昼間1年制)

【目標資格】

1・2級建築士、1・2級建築施工管理技士、
建築設備士、宅地建物取引主任者、
インテリアプランナー、商業施設士、
インテリアコーディネーター、CG検定、
福祉住環境コーディネーター 他

- 就職率95.6% (平成21年度実績)
- 資格取得サポート
- 入学後の学科変更システム

学 校 法 人
中 央 工 学 校

中央工学校 OSAKA

〒561-0872 大阪府豊中市寺内一丁目1-43 ☎0120-08-1143 TEL.06-6866-0800(代)

<http://www.chuoko-osaka.ac.jp/>

大阪・梅田より13分の快適アクセス / 地下鉄 御堂筋線「緑地公園」駅徒歩3分